慢心王の踏み台生活

匿名希望の金ピカ王

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら真っ白な空間にいた主人公。

彼は何の説明も聞かず、『慢心王』の外見と能力を持って『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生させられてしまう。

俺の言動が勝手に変換される？『踏み台』として生活しないと殺される？

「我の人生は、どうなってしまうのだ？」

ヒロインに嫌われるという目標のため、最古の英雄王が歩み始めたのだった！

「我の嫁になれ！」

目次

プロローグ ―― 1
1ギル目 出会いは突然に ―― 5
2ギル目 我の城で狼藉を働くものは許さんぞ。絶対だぞ。 ―― 25
3ギル目 不思議な横槍 ―― 44
4ギル目 我は何をしても一流 ―― 54
5ギル目 遊び心の転生者 ―― 66
6ギル目 慢心王の食料事情 ―― 82
7ギル目 満足させてくれよぉ!! ―― 95
8ギル目 フゥーハハハハハ!! ―― 107

プロローグ

『ねえ、あんた転生してくんない？』

目を覚まして真っ先に聞いた言葉はそのセリフだった。

……ここは、どこだ？

周囲を見渡す。……何もない。

床も壁も天井も、全てが真っ白な室内だ。

家具も、雑貨も何もないまっさらな空間。

窓も扉もない完全な密室。

ここがどこなのか、何故こんなところにいるのか……何も、思い出せない。

『ねえ、無視？　そーいうの、ちょっと常識がなってないんじゃないかなぁ』

頭に直接声が響く。さっきも聞いた声だ。

「……お前は……誰なんだ？」

『なんだ、聞こえてんじゃん。だったらさっさと答えてくんない？　転生するの？しないの？』

何を言っているんだ……転生？　一体何の話を。

『だからさぁ、そ～いうのはいいんだっての。いちいち説明とかめんどいし、あんたはただするかしないか選択するだけ。わっかんないかなぁ。神様が人間ごときの話に付き合う訳ないっしょ？』

神……？　お前は神なのか？

『そうそう。私は神様で～す。人間が敬いひれ伏す偉い神様なんですよ。ってかさ、そんな神様に向かって〝お前〟ってさぁ、ちょっと生意気だよね？　うん、ムカつくわお前』

頭の中で喋っていた奴が、ブツブツと独り言を漏らす。

……何を言っているのか、さっぱりわからない。

『……よし、決めた。お前は私の玩具だ』

そう宣言する声。
玩具……俺が？
「俺は人間だ」
『だから何？　私にとっては犬も人間もミジンコも全部ただの下等生物。玩具以下の価値しかないね。そういえばさ、今、神様連中がその玩具を色んな世界に転生させて遊ぶってのが流行ってんのよね。で、流行に乗り遅れるとかありえないし、私もやってみたい訳よ。それでさ、ほら、転生モノってよくいるじゃない？　〝踏み台〟ってやつが』
俺が反応する間もなく喋り続ける声。……本当に、こちらの事はどうでもいいと思っているようだ。
『でもさぁ、転生した人間ども、ぜーんぜん踏み台っぽい事しないの。……まあ、自分から嫌われに行く人間なんて現実にいるわけないんだけどさ。っていうか、どんな馬鹿でもあの態度で人に好かれるとか思わないわよね』
転生モノ……よくネット小説なんかで見るジャンルのことだろう。
踏み台という単語は、二次創作物でよく聞く、「オレが主人公だ！」と妄想して暴走している奴の事だろう。
『だからさ、私思いついちゃったの』
そんな俺の考察はどうでもいい。何故、この声は急にこんな話を始めたのか。
『踏み台がいないんなら……』
その理由を知る前に……その声……神は、俺にとって最悪な……。
『〝作っちゃえばいい〟んだって』
人生を変える一言を、投げつけた。
まるで……使い捨ての折り紙で暇潰しをするような調子で……。

俺の人生は、決めつけられた。

『お前の見た目は……そうね、王道で『Ｆａｔｅ』に出てくる慢心王！
能力も同じようにしてあげる。ああでも……性格とか態度が元のまんまだとダメね。いや、十分生意気だけど。そうね、言動も全部慢心王みたいに変換してあげる。どう？　完全完璧に〝踏み台〟！
お前はヒロインに言い寄ってオリ主に消される愚かな転生者として生まれ変わるのよ！　あはは！　おっかしー！　そうよ、これこれ。こういうのを私は見たかったのよ！　お前、絶対私を楽しませなさいよ！　お前の生きる価値なんてそのためぐらいしかないんだから！』

言い終わると同時、俺の視界は真っ黒に塗り潰された。

『舞台は……〝魔法少女リリカルなのは〟。原作知識がないと踏み台になれないし、付けといてあげる。ああ、そうそう。踏み台らしい行動しないと、私が殺すから。そのつもりでいなさい。……じゃあね』

その言葉を最後に、俺の意識は途絶えた。

「……ここはどこだ」
視界が明るくなるとそこは、見慣れない街の風景だった。
見たこともないビル群、聞いたこともない店名。
この街は……どこなんだ？
行き交う人に視線を向ける。
忙しなく早歩きをするサラリーマンはこちらに見向きもせず先を急ぐ。

買い物袋を手に下げた主婦は訝しげにこちらを伺う。
散歩中であろう老婆は目が合うとニコリと笑顔を向ける。
「……ここは……我(オレ)は……」
何もかもが、わからない。
ここはどこなのか、そもそも何故俺はここに居るのか。
数分立ち尽くしているうちに、ボヤけていた記憶がだんだん鮮明になってくる。
「ああ、そうか……我は……転生したのだったな」

記憶が蘇ると同時、知るはずのない知識まで思い浮かんでくる。
魔法……デバイス……ミッドチルダ……ベルカ……海鳴市。

「……そうか。ここは海鳴か。ふん、つまらん」
俺の口から出るのは、使った事もないような尊大な口調。
無意識のうちに出てくるその言葉は、まるで、どこぞの王様のような態度だ。
「そう言えば、あの神とかいう不愉快な声、我を慢心王と呼んでいたな。ほう、こういう事か」
確かに、この態度は慢心の極みだ。だが、俺の言動が偉そうになった程度で、一体何が変わるというのだろうか。よくわからない。
……が、そんな事より何よりまず。
「……我の寝床がないではないか」
あの神……なんにも用意せずに俺を送り出しやがった。
フツフツと感じていた恨み憎みが、加速度的に上昇していくのを感じる。
「……気に食わん」
まずは拠点となるところを探そう。
「この世界は…我が君臨するにふさわしいか」
果たして俺の住める空き家はあるのか……そう言ったつもりだった。

1ギル目　出会いは突然に

この世界に来て早くも一週間が過ぎた。
俺は街外れの廃ビルに居を持ち、最近は主に土地勘を養う為の散策をしている。
この街は意外と面白い。遊園地や市民プールといったレジャー施設が充実している上に、大きな図書館や公園、雑誌に載るほどの有名な料理店。暇潰しには事欠かない。
……まあ、一文無しには関係のない所の方が多い。

……そう、俺は一文無しだ。
街の散策中、誰かが落としたであろう財布や、封筒、アタッシュケースなどを見つけて、何とも言えぬ疚(やま)しい考えが浮かんできたこともあるが……庶民の心とは裏腹に、王の体はそれほど反応を示さなかったらしく……。
「……この我が何故、地に伏した紙切れ如きに興味を示さねばならぬ」
……とまあ、そんな感じで、目の前の１００万円の札束に嘲笑する始末。
ていうか、大金落ちすぎじゃね？　何なんだこの街は。裏社会の人間が集まる集会所でもあるのだろうか。

で、まあ、金も持たない俺がどうやって食料を調達しているのかというと、基本は商店街の八百屋なのだが……。
「お、おい坊主！　またお前か！　うちの商品持ってくのはいいが、せめて代金を払いやがれ！」
「……ふん、王である我に対し口の利き方がなってないぞ、雑種。……その無礼、万死に値する！」
「なんだとぉ？」
「そもそも、王は民から搾取するものだ。与えるものなど何も無い」
「毎回毎回訳分かんねえこと言いやがって！　今日という今日は許さんからな！　警察に突き出してやる！」

「我は世界の頂点に立つ英雄王だ。我を縛る法など存在せん。……本来は貴様に裁きを下している所だが……このリンゴの味は気に入っている。良い物を仕入れているな。貴様の商人としての誇りだけは認めよう」
「ん……お？　そ、そうか？　……へへっ、そう真正面から言われちゃ、照れるぜ」
「ふん、これからも我のためにこのリンゴを収めよ。忠道、大儀である」
「おう！　いつでも食いに来いや！　うちの果物は全部最高品質だぜ！」
「ではまた来るぞ」
と、毎日こういう感じだ。……この街の人達は親切過ぎて泣ける。
「王としての勤めを忘れ、俗世に染まるのも悪くはない……か。我の退屈を紛らわせればよい」
……廃ビルの大将の台詞ではないというツッコミは、心の奥に留めていよう。

そうこうしているうちに、まだ見慣れていない土地に差し掛かる。この辺りには確か、『翠屋』という有名な喫茶店があったな。……まあ、入れないんだが。
……何故か翠屋と聞くと、どうしても行かなければならないような衝動に駆られる。一体どういうことだ？　この店に、何かがあるのだろうか。

〝原作知識〟というものを植えつけられている俺だが、実のところ、その記憶は曖昧なものだ。
元々存在しない知識を持つということは、それほど簡単なことではないらしい。

よくわからない異世界の名称や、魔法の存在など、この世界の大元になる部分は覚えたのだが、この世界がどんな物語を歩んでいくのか、中心人物は誰なのか、わからないことも多い。
きっと、時間をかけて思い出して行くのだろう。
「……まあよい、我の記憶を我自身が操れぬというのは些か不愉快ではあるが、思い出せぬものは仕方がなかろう」
未来など分かってもつまらない。それに、あの神のいいなりになるのも不本意だ。しばらくは、何も知らない一般市民のままでいよう。

海鳴臨海公園。そこが今回の散策の目的地だ。
今は夏。気温は気にする必要はない。

……あの埃っぽい廃ビルより住み心地が良ければいいんだが。

「流石に子供の遊び場なだけある。黄金に輝くドーム状の遊具、あれは良いな」
名前わかんないけどな。
お、あの屋根付きの休憩所……広いテーブル付きか。ベッドに最適だ。
あの滑り台の下、案外掘り出し物件かもしれん。
ジャングルジムか。上からブルーシートを被せれば、理想的な快適ホームに早変わりだ。
あの砂場、掘り進めて行けば縦穴式住居になるんじゃないか？
公園……なんと素晴らしい場所。
「理想郷はここであったか……」

そうして公園の視察を続けていると、俺はあるものが気になり、いつの間にかそちらに視線を向けていた。
明らかに居住に向かない遊具であるブランコ。鉄棒に次いで優先度が低い視察対象だったため、あまり目を向けていなかったが、よく見ると、一人の少女がずっとそこに座っていた。
他の子供が砂場や滑り台で戯れているのに対し、その少女のみが、たった一人で力なく足を動かし、心の無い振り子と化していた。
明らかに、あの年頃の女の子がしていい様な表情ではない。
「……ふむ、面白い」
……しまった、面倒事を避ける心より、娯楽を求める体が先に動いてしまった。
俺の体が感情とは裏腹に少女の方へ向かっていく。
そして、狭い公園だ。直ぐに少女は俺の目の前まで来ていた。
「……不愉快な顔だ。王の目前で不敬であるぞ」
「ふぇっ!?」
これが俺と、未来の魔法少女との出会いだ。

ｓｉｄｅ　???

私は、何のためにいるんだろう。
そうため息を吐いて、私はブランコをキィキィと鳴らす。
私の家は喫茶店をしているの。
お父さんと、お母さんのお店。
お兄ちゃんとお姉ちゃんも、剣の道場で修行をする合間に店の手伝

いをして、雑誌の取材が来るくらいには繁盛していた。
でも、ある日、お父さんが大怪我をして入院しちゃったの。
その日から、お兄ちゃんは何かに取り憑かれたみたいに道場で剣を振っている。
お父さんだけじゃなくて、お兄ちゃんまで倒れちゃいそうで、怖い。
お母さんは、ただでさえお客さんの多い店で、お父さんの分まで働いて、こっちも無茶してるの。
誰も私を……なのはを見てはくれなかった。

でも、それは仕方のないことなの。
お父さんが倒れちゃって、忙しいんだもん。
なのはばかり、構ってる暇なんてないの。

だからなのはは……そんな家族の手伝いがしたかった。
そうすれば、お母さんは忙しくなくなるし、なのはの事、みんなが見てくれるって思ってた。

でも……なのははまだ小さいから。
何かがしたくても、何にもできない。
手伝えることを探そうとしても、なのはがウロチョロしてると逆に邪魔になっちゃう。
だからなのはは、みんなに迷惑を掛けないように、忙しい昼と夕方はこの公園にいて、夜になったら、心配をかけないように家に帰る。
それで、「おかえりなさい」って笑うの。

そんな日々をずっと、ずっと送ってる。
公園で遊んでいる子達からは「ブランコの主」とか言われているのは知ってるの。
……でも、私は家族に迷惑をかけなければそれでいいから。
お友達に不気味がられて、遊びに誘ってくれる人がいなくても、それでいいから……。

だから……。

「……不愉快な顔だ。王の目前で不敬であるぞ」
「ふぇっ!?」
私と同じ歳くらいの、綺麗な金髪で紅い目をした、白シャツに黒いジャケットの見るからにホストな服装をした男の子に話しかけられたのは、予想外だったの。

「間抜けな声を出すな。この我に話しかけられるという名誉を誇るが良い」
「え……あの……。貴方は誰ですか?」
外国人みたいな人に話しかけられて驚いたけど、よく聞くと話しているのは日本語で、少し安心したの。
「なにぃ? 我を知らぬと言うか? 全く、歴史は一体何を教えているのだ。それとも、貴様が特別無知なだけか? 雑種」
「ざ、雑種?」
なんだか、とても失礼なことを言われたの。それに、態度も凄く悪いし、この人、本当になんなのかな?
「まあ良い。知らぬというなら名乗ってやろう。この王の名を貴様の魂にまでよく刻み付けるがいい。我は人類最古にして唯一の英雄王。……ギルガメッシュである!」
胸の前で腕を組んで、綺麗な仁王立ちをした男の子は、ものの見事なドヤ顔でそう言ったの。

「ギルガメッシュ……君?」
「ん……うむ。そうだ。我は……ギルガメッシュ……だよな?」
「なんで急に自信なさげなの!?」

偉そうだったり、急に態度を変えたり……この人よくわからないの。

「ああ、そうか……我は……ギルガメッシュか！」

「勝手に納得したの!?」

この人、何をしに来たの……。

「ふん、まあそんなことはどうでもいい。おい、雑種」

「わ、私のことなの？」

「貴様以外に誰がいる。……貴様、まさか王であるこの我に名乗らせて、よもや自分が名乗らぬとは言わないよな？」

「え？」

「ウスノロが。我は貴様の名を聞いているのだ。疾く答えよ！」

「あ、はい！」

すごく偉そうでムカつくのに、何故か普通に返事をしてしまった自分に驚くの。

この人……性格は悪いのに、どうしてだか、逆らっちゃいけないようなオーラを持ってるみたい。

「……私は、高町……なのはなの」

ギルガメッシュ君……長いからギル君に、なのはは自分の名前を教えるの。

「ほう……なのはなの、か。まるで道化のように愉快な名前だな」

「ち、違うの！　なのはなの！」

「なのはなの、だろ？」

「な・の・は、なの！」

「だから、そう言っている。なんだ貴様、その年でもう耳をやっているのか。……いたわしい事だ」

「ちーがーうーのぉ!!」

この人、なのはをからかってるの？　いや、からかってる！　だっ

て目がすっごい笑ってるもん！　あっ、ついに口もニタニタ笑い出したの！

「ふはははは！　いい、いいぞ。貴様は道化にふさわしい。我をここまで笑わせたのは貴様が初めてだ。栄誉に思えよ雑種」

クツクツと笑う失礼なギル君が、なのはを見てまた笑い声を大きくする。

……なんだか、この人といると無性にはらだたしいの。

結局、名前も呼んでくれないし……。

「そうだ。貴様、我のものになれ」

「……ふぇっ!?」

だから、唐突な提案になのはの思考は一瞬停止したの。

『おれのもの』……って、つまり……。

「我に仕えよ。……食前の余興の道化としてな」

「だー！　そういう事だと思ったの！」

もう！　もう！　ついに悟ったの！　なのはとこの人はあいしょーさいあくなの！　だから一緒にいるだけでこんなにも胸がムカムカするの！

「なのは、ギル君のこと嫌いなの！」

「ぎっ――!?　な、貴様……何と言った？」

「ギル君のこと嫌いなの！」

「ぎるくんとは……まさか我の事か？」

よ、よくわからないけどギル君がショックを受けてるの。……ふふふ、知らないうちにギル君にいっしむくいたの！

もっとやり返すの！

「ギル君名前長いからギル君でいいの！　ギル君なんか偉そうでムカ

つくからギル君って呼ぶの！　ギル君はギル君でギル君なの！」
「や、やめろぉ！　その訳の分からぬ呪文のように〝ギル君〟を連呼するな！」
「ふんっ、なの！」
　何故か顔を赤くして眉を顰めているギル君を見て、私は〝ふてきなえみ〟を浮かべるの。
「ふっふっふ～、これに懲りたら、もうなのはを虐めるのはやめるの！」
「貴様ァ……雑種の分際で、よくもこの我をコケにしてくれたなぁ……！」
　……あ、あれ？　なんだか、予想以上に怒ってるの……。
「その無礼、万死に値する！　貴様、せめて散りザマで我を愉しませよ！」
「ヒィ～！　滅茶苦茶怒ってるのー！」
「当たり前だ！　雑種ごときがこの王と取引を交わそうなど片腹痛いわ！」
　今にも襲いかかってきそうなくらい恐い顔をしているギル君が、ジリジリと私によってくる。ヒェ～、誰か助けてなのー！

「ふん、その罪、贖いたくば貴様の身の内を語るがいい」
「……えっ？」
　でも、ギル君が提示した罰は、あまりにも拍子抜けな内容。
　……もしかして、意外と優しい人だったりするのかな？
「でも…どうして？」
「ふん、貴様があまりに無様な顔をしていたからな。そんな顔は過去のトラウマかそれに準ずる経験をしておらねばできん。……貴様の思い出したくない過去を洗いざらい吐かせてやれば、貴様も辛かろう」
　前言撤回！　この人、最低のドＳなの！
「さぁ、さぁ、劇を始めるがいい！　我に愉悦を感じさせよ！」
「うー！　うー！」

「なんだ、豚の声真似か。それもまた愉悦。故に一興！」
「うーー!!」

そして結局、なのははギル君に家族の事と、なのはが公園にいる理由を全部話してしまったのです。

……なんだろう、この敗北感。

「……ふん、つまらん」
「んなっ!?」
自分から聞いといてなんなの、この人！
「何故、人に気を遣わねばならん？　我の道は王道。誰も邪魔することは許されん。故に、貴様も他者など気にせず蹴散らせばよいではないか」
「ギル君の性格ならきっとそうだろうね……」
「だからギル君はやめよ」
でも、正直言って、なのははギル君の唯我独尊な性格が羨ましいの。
そんな自由な生き方ができていたら、なのはは今頃……。

……やっぱ嫌だな。考えるのはよそう。

「でも、なのははお母さんに迷惑をかけたくないから……」

「笑止！　娘に信頼されておらんとは、その母親も救われんなぁ」
「なのははお母さんを信頼してるの！」
「ほう？　ならば何故、母に世話を焼かせてやらん」
ギル君は、心底不思議そうになのはの目を覗いてくる。
世話を焼かせる……それがお母さんを信頼すること……？
「どういうことなの？」
なのはが聞くと、ギル君はふんっ、と鼻で笑う。
……行動の一つ一つがかんにさわるの。
「王の勤めは君臨すること。使用人の勤めは仕えること。そして母親の勤めは子を世話することであろう？　信用無き王は革命に堕ち、疑わしき使用人は職を辞される。なら、子に世話を拒まれる母もまた、信頼されておらんということではないか」
ギル君の例えは、よく分からなかったけど、でも、言いたいことは何故かすんなり理解できたの。
だからこそ、なのはは、自分の間違いにすぐ気付いたの。
「それは……」
「人には、肩書き毎の役割がある。それを成せないというのは、その者にとっては不名誉なことではないか？」
お母さんの役割……。そう聞いてなのはは、役に立ちたいのに何もできない、なのは自身の悩みを思い出した。
……そっか。お母さんは、お母さんとしての役目があるんだ。
……じゃあ。なのはは……。
「……なのはの……子供の役目はなんなの？」
なのはは、自分が泣きそうになるのを感じながら、鼻声混じりにギル君に聞くの。
今までなのはがやってきたこと、それは……本当に意味があったことなのか。
きっと、ギル君の返答だけが、その答えを教えてくれ――――
「知るか」

げんじつは、ひどーである。

「ちょっ……そこはキリッと、『子供は世話を焼かれるのが仕事さ』って言う場面じゃないの!?」

「そんな額縁に収まる我と思うなよ雑種。王たる我に、童女の役目など知ったことか。我はただ、頂点に君臨するのみ」

あ、駄目だこの人、早く何とかしないと。

「というか、貴様自身が答えを出したではないか？」

「ほぇ？」

「『子供は世話を焼かれる』……か。なるほど。言い得て妙だ。親は世話を焼き、子は世話を焼かれる。世界は上手く回っているではないか。やはり我の所有物はこうではなくては」

「あ……」

「貴様の真意を理解できるのは貴様自身と、王たる我だけだ。貴様の中に答えはあったではないか」

「ギル君は何も理解してなかったの」

「ギル君はよせ」

でも……そっか。子供は、世話を焼かれるもの。

「じゃあ……なのはは、お母さんに迷惑を掛けても、いいってことなの？」

「なわけあるか、愚か者」

「えぇー」

結局、最後の最後まで話が合わないなのはとギル君なの……。

「雑種、貴様の目的は母親に甘えたいなどと、そんなくだらぬ戯言だったのか？」

「え？」

「違うだろう？　貴様は、何故こんな公園に1人佇むようになったのだ？」

「それは……お母さんの、役に立ちたい？」
「そうだ。なのにお前、母親に迷惑を掛けてどうする？　貴様が童女としての役目を果たしたところで、それは母に迷惑を掛けたという結果を残すのみ。母の役に立ったとは言えんだろうが」
「う……そうでした」
「ふん、やはり愚か者か」
　言い返す言葉もないの。

「ならば、貴様にできることはただ待つのみだ」
「……うん」
「貴様のような小娘1人が仕事を手伝ったところでたかが知れてる。床の雑巾がけを命じられた所で歩みの邪魔にしかなるまい」
「ぐっ」
「ならば、貴様にできる唯一の報いは、邪魔にならぬように脇に避けている事。その点で言えば、貴様の選択は正解だったな。そこだけは褒めてやろう」
「……ありがとう？」
「つまり、貴様が自分の目的を成すためには、父親の復帰までこの公園で一人寂しく過ごしていることだな」
　……それもそうなの。なのはが一生懸命考えて、その末に閃いた事がここで待っていること。なら、なのはにはそれをやり遂げる義務があるの！
「あ、ありがとう。ギル君」
「だからギル君はやめよと言っているだろう！　なんだ？　貴様断罪されたいか？」
「断罪は嫌だけどギル君はギル君なの！」
「この……我に逆らうとは大した度胸だな、雑種！　……だが、まあ。こういうのも悪くない」
　こめかみに血管を浮かせてたギル君が、ふと柔らかい表情に変わったの。
　なのはと話している最中はニヤニヤした気持ち悪い笑い顔か、仏頂

面だったのに、見たこともない顔になってちょっとビックリ。
その、まるで小動物を見るような優しい目で、ギル君は言ったの。

「貴様、俺のものになれ」

ギル君は、ずっと崩さずに組んでいた腕を下ろして、右手をなのはに差し出してそう言ったの。

「またなの？　だからなのはは道化師さんじゃないの！」

ギル君はやっぱりなのはをからかうのが好きみたいです。なのはは嫌だし、ギル君は嫌いだし、絶対にお断りなの。
しかし、次のギルくんの一言で……。

「いや、我の嫁になれと言っているのだ」

時が、止まった。

「……ん？」
「『ん？』ではない。我の嫁になれと言っているのだ。返事は〝はい〟か〝よろこんで〟のどちらかしかあるまい。英雄王の妃だぞ？　雑種にとってこれ以上の誉はあるまい」
「え……えええええええ!?」

なのはの体温が急上昇するのがよくわかるくらい熱が出てるの。
絶対に顔が真っ赤になってる。
なんで!? どうしてこんなタイミングでぷろぽーずが出来るのかなぁ!?

あと〝はい〟も〝よろこんで〟も一緒なの！

「な、にゃにゃ……にゃんで……」
「何を猫になっている。……ほう？ そうか。それは我に飼われたいという自己主張の一つか」
「違うの！ な、なんでなのはがギル君のおおお、お嫁さんにならなきゃいけないの!?」
「ギル君はやめよ」
ギル君はさっきまでなのはをからかい甲斐のあるオモチャ位にしか思ってなかったはずなの！ なのはの事を雑種とか呼んでるし、なのはの事を好きみたいな感じは全然出てなかったの！
「何故と？ 王の選択に理由など必要ない。我が貴様を欲しいと思う。ただそれだけで十分であろう。他に何が必要なのだ？」
「……」
ぼ、暴君だ。この人本物の暴君だ！
「だが、一つ理由を作るとすれば……貴様に興味が湧いた」
「へ？」
「王である我にここまで刃向かった者は貴様が初めてだ。本来、無礼な民は生かすに値しないのだが、何故か貴様は処断する気が起きん。バカに割く時間はないと本能が訴えているのか、愚か者の戯言はたとえ世界を極めし俺にも解読不能なほどのものだったのか……貴様の無礼千万なセリフの数々は我の心に届いておらぬらしい」
顎に手を当てギル君は、そう言う。
「長々と失礼な事聞かされてなのはの心はズタボロなの！」
「ふはははは！ まあ、そういうことだ。我は手に入りにくい物ほどどうしても手に入れたくなる主義でな。不敬な態度をさておいても、難

攻不落な貴様の心、手に入れたくなった」
難攻不落どころか崩落寸前まで傷付けられてるの……。
……でも、何故だろう。
すっごく嫌な奴なのに、物凄く嫌いな奴なのに。
欲しいと言われて、ホンの少しだけ……胸の奥が、熱くなったみたいな……。
「ふん、蒐集家（コレクター）として当然の事よ」
やっぱなし！　ときめいてなんか無い！　無いったら無い！　こんな奴にときめかない！
「だから、貴様を特別に我の宮に招待してやる」
「……宮？」
「ああ、こんなチンケな遊び場よりは退屈せんだろう。嫁である貴様だからこそ入れるのだぞ？」
「……」
「家に居場所がなければ、我の所に来い。小娘一人程度、招けぬような狭量ではないぞ」
「……うん」
もしかしてギル君、なのはに気を遣ってこんな事言ってるのかな。
なのははやっぱり家には帰れないけど、でも、行く場所は公園だけじゃないんだって、教えてくれてるの？
……やっぱり、ギル君は。
「……いつの間にやら日が落ちてきたか」
「あ、そうだね。もう帰らないと」
いつの間にこんなに時間が経ってたんだろう。
空を見上げると、遠くに赤い空が消えかかって、頭上は満天の星で

溢れ返っている。
「……綺麗」
「そうだろう？」
「……なんで、ギル君が自慢気なの？」
「ギル君はやめよ。……我は全ての頂点。最古にして唯一の英雄王だ。故に、この時空の果てまで、世界は余さず我の庭だ。よってこの星空すら俺の所有物となる」
「……なにそれ」
「ふん、今は分からずともよい。だが、いずれは貴様の物になるのだぞ？　貴様は我の嫁なのだからな」
……。
「んなっ!?」
あ、危ないの……不意打ちのロマンチストに危うく落とされかけたの。……気を付けよう。油断は大敵なの！
「な、なのははギル君のお嫁さんじゃないの！」
「ギル君はやめよ。……そう反抗していられるのも今のうちだ。時期に貴様は我の魅力に気付くことになるだろうよ。何せこの俺の裸身は最高水準のダイヤに勝る」
「何言ってるの!?」
流石になのはの前で裸になったり……しないよね？
「は、恥を知るべきなの！」
「恥だと？　この世界に誇る王の身体、恥じる要素がどこにある？」
駄目だ！　どうにかしないとこいつはホントに脱ぐ気なの！
「やっぱりギル君嫌いなの!!」
「だからギル君は……って、おい雑種、どこに行くつもりだ！　まだ話は終わってないぞ！」
遠くで叫ぶギル君の声を聞きながら、私は家に戻ってきたの。
「……ただいま。はぁ、今日はやけに疲れたの……」
ぐったりと肩を落としながら玄関をくぐると、リビングの方からバ

タバタと慌ただしい音が響いてきた。
「なのは！　どこに行ってたの!?」
「ふぇっ？　お母さん？」
　リビングからいきなり飛び出してきたのは、どこか必死な表情のお母さんだったの。
「心配したのよ！　こんな遅くまで……」
「遅くって……お、お母さんこそ今日は帰るの早いね」
　いつもはこのくらいの時間、まだ誰も帰ってきてないはずなの。どうしてお母さんがうちにいるの？　まだ店は開いてるはずなのに……。
「それはね、今日は恭也が店の手伝いに来てくれたから、私はなのはの様子を見に来たのよ」
「なのはの……？　お母さん、なのはの心配してくれたの……？」
　お兄ちゃんが手伝いに来たといっても、お母さんは一番料理が上手なパティシエさん。たとえ手が空いたからって、そう簡単にお店を抜けられるはずないのに……。
　どうして、お母さんはなのはのところに？
「心配に決まってるじゃない！　だってなのはは……〝私の娘〟なんだから！」
「……」
　あ……そうか。そうなんだ。
　お母さんは、なのはの事、見てない訳じゃなかったんだ。
　ちゃんとなのはの事見てくれて、心配してくれて……。
　忙しいはずなのに、こうして、なのはを抱きしめに来てくれたんだ。
「お母さん……」
「なのは……」
「お母さん……」

「なのは」
「お母さん！」
「なのは、なのはぁ！」
なのはは、すっごく久しぶりに、お母さんの胸の中で泣いてたの。
暖かくて、柔らかくて……とっても大好きな……なのはのお母さん。

「……ふん」

開けっ放しの玄関、その先の塀の影から、金の髪で紅い目で、ホストみたいな格好をした誰かが不愉快そうに、でも少しだけ優しい目をして引き返して行った事は、誰も知らない出来事だった。

ｓｉｄｅ　ギル

「ふん、中々の道化ぶりであったな。とくと笑わせて貰ったわ」
いやぁ、良かった！　良かったねなのはちゃん！
「雑種にしては良い笑いのツボを押さえている」
「一人じゃ寂しいだろうし、一緒にいてあげるよ」と言ったつもりが、『俺の嫁』宣言になってしまった時は焦りに焦りまくったけど、結

果として、お母さんと仲直りできたみたいだし、万事解決って感じだな！

「次会った時はどうイジメ倒してくれようか。くくっ、雑種の苦悶に満ちた表情が目に浮かぶわ！　ふはははは！」

グワー！　このギルボイス誰かどうにかしろ!!

真っ暗な住宅街を、堂々たる威厳を持って歩く少年が、内心で悲痛な叫びを上げていることなど、知る者は誰もいなかった。

2ギル目　我の城で狼藉を働くものは許さんぞ。絶対だぞ。

見ず知らずの幼女に俺嫁宣言してから3日程が経つ。
あれ以来、あの公園には近付いていない。

……いや、だって。どうしろと？
初対面で俺の嫁になれとか言って、どの面下げて会いに行けってのよ。
折角の理想的な公園だったのに、このギルガメッシュとかいう勝手な王様のせいで移住計画はおじゃんである。
まさか、この慢心王に名前があるとは思わなかった。
転生前の名前を名乗ろうとしたら、この名前が出てきたんだよな。
……つまり、これが今世での俺の名前。
「我は、最古にして唯一の英雄王、ギルガメッシュ」
……意外とカッコイイフレーズだな、なんて、思ってないんだからね！
と、冗談は置いといて……。

ここは街外れの廃ビル最上階。
壁は取り払われ、支柱のみで支えられたこの部屋。窓もなく、どの角度からでも外の景色が一望できる吹き抜けで、時折、冷たい風が俺を叩く。
埃だらけの絨毯やカーテンで装飾されたこの部屋で、不法投棄されていた切り傷だらけのテーブル、戸の無いクローゼット、曇った姿見が運び込まれ、生活圏としてギリギリ認められる程度の居住空間の中、俺はバネの飛び出たソファに肩肘を付いて、足を組んでくつろいでいた。
……リラックスの仕方も、どこぞの王様風の慢心体勢だ。
このまま、「よく来たな、勇者よ」とか言いそうなくらい、悪役めい

た笑みを浮かべている。
「……退屈だ。魔法などという面白そうな知識があるから、どんな奇天烈な事件が起きるのかと思えば、それらしい事は何もないではないか」
そうだ。あの神が選ぶほどの世界。何か大きな事件とか、常軌を逸したイベントが起きないはずがない。
なのに、この世界は平和そのもの。稀に銀行強盗やハイジャック、爆発テロが起こる程度の普通の現代世界だ。
……いや、十分物騒だが。
まさか、魔法とかいうのはチャチなおまけ要素で、実際は銃撃戦メインのギャングアニメとかじゃないよな？
某大泥棒三世の映画で出てくる超能力みたいな軽いノリで魔法が出てきたら俺は怒るぞ。

と、あまりにも暇なためにそんなどうでもいい事を考えていたその時……。

『やだ！　離して!!』
下の階で、よく通る高い声が響いた。

side　三人称
「ちっ、コイツ、口枷外した途端にこれだぜ。おい、少し黙ってろ！」
「ヒッ！　いやぁ!!」
薄汚れた廃ビルの内部、そこには全身黒ずくめの男が複数人と、手を後ろに縛られ、身動きが取れない少女が1人いた。
どうやら少女はこの男達に誘拐されたらしい。

「まあまあ、いいだろ？　このくらい威勢があった方が、愉しみ甲斐があるし」
「あぁ？　ただメンドくせえだけだろ？　ちっ……一発ぶん殴れば大人しくなるか？」
「イヤ！　イヤァ!!」
集団の中から、二人の男がジリジリと少女に寄る。
少女も後ずさってはいるものの、縛られていては早く動けるはずもなく、男たちとの距離は詰まっていくばかり。
「もう無駄な足掻きはよせよ。面倒だろうがよ」
「あっ……離して！　やめて！　ねぇ、お願いだから……」
ついに少女と男の距離は０に。少女はリボン付きの赤いワンピースの襟を掴まれ、少し苦しそうに顔を歪ませながら尚も逃げようと抵抗し続ける。
こんな人気のない廃ビルに連れ込まれてしまった時点で、いくら声を張り上げようと、助けが来ないのは目に見えている。
自分より二回り以上も体の大きな男が二人迫っているのだ。どれだけ抵抗したところで、結局は逃げ切れる手段なんてないことくらい、理解している。
少女は俗に言う天才だった。
イギリス人とのハーフで、ＩＱ２００越えの天才児かつ帰国子女。
その才を疎まれて学校のクラスメイトからは敬遠されがちな、頭の良い子供だ。
故に、もう自分に助かる術が無いという事は自分自身が一番理解している。
もし運良く今自分を押さえつけている二人の男の手を逃れたとしても、裏にはまだ５人もの人影が見えるし、そのうちの一人が、怪しげな注射器を用意しているのをたまたま確認してしまった。
自分がここで、どんな目に遭わされるのか……。

無垢な子供であればまだ良かった。
夢見がちに、「きっと誰かが助けてくれる」と、窮地を救う王子様を連想し、希望を持つことができただろう。
しかし、誘拐されたのは〝運が悪いこと〟に、大人ですら勝ち目のない頭脳を持つ天才少女。
理論的に、物理的に、希望的観測を持つことなく、自分は崖っぷち……どころか、既に崖から転落している最中なのだということを瞬時に把握していた。

もし、奇跡的に一般人がここを通過したらどうなるか。
この人数に立ち向かっても返り討ちは必至。
警察に連絡したとしても、距離的に、警察が到着する頃にはもう手遅れだ。
何をどう足掻いても詰み。
助けは来ないし、来ても助からない。

そう理解しても……やはり少女は、抵抗を諦めたりはしなかった。
「ん……やっ！」
「グッ!?　こ、このガキ!!」
例え、意味のない蹴りで相手を余計に怒らせたとしても。
「ぐぅう……！　うぐぅ!?」
例え、服が捻れて自ら首を締める事になっても。
「いい加減……大人しくしやがれ!!」
例え、抵抗するほどに、暴力に晒されることになると分かったとしても……。

少女は、無駄な足掻きを諦めない。

その結果……愉悦を求める王の退屈は、解消された。

「ふはっ……」

その声が聞こえたと同時、全ての音が止まった。

「ふははは……」

少女の必死な足掻きを笑いながら見ていた男達も、少女に直接手を挙げていた男も、理不尽な暴力に晒されていた少女自身ですら、声を出すことなく、音の発生源を探していた。

「フハハハハ!!」

そして、王の機嫌は最高潮に達していた。

「見事であるぞ小娘！　無駄と知りながらも、決して敵に下る事のないその心意気……まさしく最高の道化ぶりであった!!」

その声に、全員が一斉に振り返る。

このビルは最上階のみが全面ガラス張りの構造で、この階より下は全て外壁がついている。

だが、それでも内壁は最上階と同じく全て取り払われており、現在男達がいる場所からは、上に向かうための階段がよく見えていた。

階段の上。胸の前で腕を組み、威風堂々とした姿で立ち塞がる一人の少年がいた。

「いやはや、そこな雑種どもに蹂躙される様、アリの観察程度には楽しめたぞ。……決めたぞ小娘。貴様、道化として我に仕えよ。さて、まずは此度の劇の褒美をくれてやろう……何をして欲しい？」

いきなり現れて、何を言っているのか。

少女は戸惑う。

何をして欲しい？　正直言えば、助けて欲しい。

……それがもしも、見るからに戦闘力を有した、格闘家のような大男なら迷わず「助けて！」と叫んでいただろう。

……だが、今自分の視線の先……いや、この場にいる全員の注目を集めているのは、自分よりも小さな男児。
正義の味方に憧れ、強弱の区別がつかないような、偉ぶりたい年頃の男の子だ。
助けを求めれば、きっと臆せず、この〝悪者〟達に立ち向かうだろう。が、それまでだ。
いくら戦う気概があれど、実際には勝てる要素などない。

無駄な足掻きを続けていた少女がいうのもなんだが、その少年は、あまりに無謀過ぎた。
……だが、少女がどんな選択をしたとしても、未来が変わることはない。

「……目撃者だ。消せ」
「あぁ？　ったく……これから〝おたのしみ〟だったってのに……白けるぜ」
「ざけんなよ、どいつもこいつも……。ガキだからって容赦しねえぞ」
少女が助けを求めようが求めまいが、少年が立ち向かおうが逃げようが、男達は……少年を生かしておくつもりはなかった。

「っ!!　――逃げて！」
無意識に叫んだ少女。
その声は果たして、少年に届いたのだろうか。

「思い上がったな、小娘が……この我に逃げろと言ったか？」

否。

「随分大きく出たものだな……雑種」

例え届いたとしても……。

「たかが有象無象の集まりごときに臆して何が王か！　おい、道化。貴様の仕える王がどれほど偉大か、教えてやろう」

その思いを聞き届けるには、少年は尊大過ぎた。

「……しかし、雑種がいくら集まったところで、我の相手が務まるかどうか……これは困った。言った手前、無様な姿は見せられんというのに、我の力を1割も出せぬような相手しかおらぬのでは、話が変わってくるな」

少年は顔を歪ませ嘆息する。

それを挑発と受け取ったのか、男達は揃って青筋を立てて、それぞれ得物を手に取る。

「テメエ……調子乗ってんじゃねえぞ！」

携帯警棒を振りかぶって襲い来る男。

しかし、少年の目に怯えはない。

「ダメっ！　逃げてぇ!!」

少女の悲痛な叫びが響く。

そして、男の警棒がついに少年の頭を――――。

ｓｉｄｅ　ギル

ヤバイ。何がヤバイって全部がヤバイ。

見るからに危ない奴が見るからに犯罪行為を犯しているのもヤバイが、そんな奴らの前に堂々と出て行った俺自身の身が何よりヤバイ!!

どーしてくれんのこの状況!?　俺、ちょっと慢心してるだけのパンピーよ？　ほら、なんか全員こっち見てるし、なんか「消せ」とか言ってるし！

こ、殺される!!
……ここは冷静になるんだ。そう、まずは体勢を立て直そう。逃げるんじゃないぞ。ちょっと退くだけだ。
ほら、あの女の子も「逃げて」って言ってるじゃん！　ほら、なんか痛そうな警棒持ってるじゃん！　なんで動かんの？　何で避けないの!?
「くどいぞ道化。黙って我の偉大さを噛み締めろ！（ありがとう名も知らぬ女の子。俺はここで逃げるを選択するぜ！）」
そう言い、俺の体が勝手に動く。
目の前まで迫った警棒を、左手で掴み、受け止める。
……は？
「……な……んだとぉ？」
「なんだこれは？　まるで童子の戯れ合いだな。これなら猫の喧嘩の方がまだいい勝負を見れるぞ。よもやこれが本気とは言うまい（あっぶな!?　喧嘩なんて子供の頃したきりだし、こんなん勝てるわけないだろ！　っていうか何で今の攻撃受け止められたんだよ。あ、相手が本気じゃなくてよかった……）」
外と中で致命的な差がある件。
うぉおおい!?　挑発してどーするよ！　ここは一言謝って、見逃して貰おうそうしよう！
そ、そうだ。「ごめんなさい」だ。いくら慢心王でも謝罪の言葉までは無茶苦茶な変換しないだろう!?
「すまんな。少し貴様を過大評価をしていたようだ。所詮雑種は雑種だったか（ごめんなさい）」
って、ちょぉおおおお!?
「て、テメェエエエ!!　調子乗ってんのか!?」
「さっきからそればかりだな、雑種。赤子でも貴様よりは言葉を覚えるぞ（おっしゃる通りです！　俺みたいな口ばっかのガキはとっとと帰らせて貰います！）」
あ、駄目だ。もう俺黙ってよう。

「て、テメェエエエ!!」
うわ、また来た！
そして振り下ろされる警棒。……更に難なく受け止める俺の左手。
「……ふんっ、つまらん。貴様風情では我の相手は務まらん。役者としては力不足だ。散りざますら見るに値しない。疾く去ね」
「ガァ――っ!?」
もう俺の意思とは関係なく口を開く俺。
そして、警棒を握った腕を、力も込めず横に振る。
……それだけで、目の前の男は壁まで吹き飛ばされた。

「「「……え？」」」
……え？

「余興としては最悪な配役だったな。さあ、次は誰だ？」
この空間、冷静を保っているのは、俺の体だけだった。
「……なんだ、誰も来ぬのか？　ふむ、昔から王は玉に座して敵を待つものと相場が決まっておるが……攻めてこぬなら、こちらが赴くしかあるまい」
そして……。
「聞くまでもないが……覚悟は出来ておるな？　この王に対し非礼の数々、その罪、貴様らの命を持って償うがいい！」
蹂躙が始まった。

「よくもカズを！」
「つまらん」
鉄パイプを手の甲で弾き、がら空きの腹に拳をめり込ませる。
「うっ……うぉおおお！」
「つまらん」
ナイフの側面を二本指で挟み、驚いた表情のまま固まっている頬に

拳を抉り込む。
「こ、これなら！」
「つまらん」
スタンガンを蹴り上げ。そのまま振り上げた足で肩を砕く。
「ふざけてんじゃねーぞ！」
「……つまらん！」
チェーンを振り回す男に対して、普通に歩いて近づき、たまに横に移動する。
チェーンに掠ることすらなく接近した俺は。足払いからのハイキックで男を空に飛ばす。
「つまらん！　つまらんつまらんつまらん！　つまらんぞ雑種！　貴様ら……この我をおちょくっているのか？　まさか、この程度の力しかなくこの我に得物を向けたと？」
常人を逸した動きに、俺自身が驚きまくっている中、外側の俺は全く別の事で怒り猛っていた。
「こんな屈辱は初めてだ。恥を知れ！　雑種がァ!!　この無礼、万死に値する！」
そして、最後の一人を……。
「こ、このヤロォオオオ！　これを見てもナマ言えるかオラァ!?」
「黙れ雑種！」
「グァァァァァ!!」
黒光りするL字のナニカを取り出した男が、ライダー真っ青な飛び蹴りで後頭部から壁に衝突した。
……なんか、砕ける音聞こえたけど、死んでないよね？
「……ふん、至高の宝を使うまでもない」
……宝って何さ。
「……あ、あなた……強いのね」
ボーッと立ち尽くす俺に声を掛けたのは、襲われていた少女。

もはや意識があるのは、俺と彼女だけだ。
「……なんだ道化。我は今機嫌が悪い」
「そ、そう……ごめんなさい。でも、これだけは言わせて！　た、助けてくれてありがとう」
「……ふん」
そ、そうか。よくわからないままに体が動いてたから、何も考えてなかったけど……今の俺、この子を助けたんだよな。
……でも。
「助ける？　おかしなことを言うな。貴様は我に仕える道化であろう。我は貴様に褒美をやると言ったのだ。貴様がとっとと望みを言わぬから、煩い羽虫を追い払ったまで。……これで気兼ねなく話せるであろう？　さあ、貴様は何を望む？」
でも……実際に助けたのは本心じゃない俺で、その俺には、助けたという自覚はない。
そもそも、俺の本心はこの子を……。

……この少女の感謝は、一体、誰に向けられたもので……誰が受け取るべきなんだろうか。

「え？　あの……こういうの、なんと言えばいいのかしら。……あなた、謙虚なの？」
そしてこの少女も少女で、随分と的外れな事を言っている。
この子、もしかして天然？
「謙虚？　フハハハハ!!　やはり貴様は面白い！　謙虚など、この我から最もかけ離れた言葉だ！　いいか？　我は最古にして唯一の英雄王……ギルガメッシュだ！　世界の全てを我の財とし、それでも渇く蒐集欲を持っている。謙虚？　そんなものは狗にでも食わせておけばよい。覚えておけよ、雑種」

俺の気も知らず、お調子者の口は勝手に動く。
でもまあ、いつものようにわけのわからん口上だ。どうせこの少女も呆れるだけで……。
「ギルガメッシュ……？　それって『メソポタミア神話』の、あのギルガメッシュ？」

しかし、返ってきた反応は、俺の思っていた物とは少し違った。
「ほう？　我を知っているか、道化。……やはりあの雑種が無知だったのだな」
「いや、結構マイナーだと思うけど……」
「なん……だと……？」
おおっ、初めて俺の口から本気の絶望が漏れた。
「ふ、ふふふ……やはり素晴らしい道化だ。このような虚言に我が踊らされるとは……」
「いや、まず教材にも載ってないし」
「ぐふっ!?」
ちょおおお！　俺の体で勝手に吐血すんなし！
「ば……馬鹿な……あああありえん！　あの残念なノッブですら教科書の主役ではないか……何故我が……学びの書に載らぬのだァ！」
落ち着け俺！　何言ってるか全然わかんないから！　ノッブって誰だよ！　これ絶対俺以外のナニカが入り込んでますから！　俺の行動が変換されるとかそういう次元じゃないから！
誰だかわかんないけど俺の体に取り憑いてる奴、お帰り下さい!!

「……うむ、落ち着いた」
「……大丈夫なの？」
「ああ、何も問題ない。……だからそんな同情的な視線をやめよ。無礼であるぞ」
……どうにか、悪霊は去ったようだ。
取り敢えず落ち着いて……そうだ。無理に制御しようとするから

ダメなんだ。ここは言う通りにならなくとも、とにかく手綱を握る事に意義がある。
俺の言葉を、『最低限』変わらず伝えられるように落ち着こう。
チラリと少女に目を向けると、ちょうど目があった。
よし、ここで「大丈夫だったかい？」と一言声を掛けるんだ。

「万死に値する」
「へ？」

違う、そうじゃない。

ｓｉｄｅ　誘拐された少女

私は、天才ともてはやされて育ってきた。
親は私に期待を向けるけど、それ以外の感情を向けては来なかった。
同年代の子には、「イヤミみたいな奴」と避けられた。
私にとって問題は解けるもので、解こうと努力するものじゃなかった。
だから、人生は簡単で、生きる意味なんて、目標なんて、見つかりっこなかった。
流れるように問題を解き、流されるように海外留学の話が出て、ついでのように外国語を覚える。
そして、人生初めての難題が誘拐とか、泣けるわね。
でも結局、その問題も解決しちゃった。……それは、私の力じゃないけれど……。

（この子は……不思議な人ね）

そう思ったのは、何も変なことじゃないと思う。
だって、まるで自分が生まれながらの王であるかのような態度。
しかも、それに対して何の疑問も覚えていない。……ううん、それどころか、そうであること以外ありえないとさえ思っている。とても純粋な目。
それでいて、その卓越した戦闘力。まるで歴戦の戦士。それも全ての戦を制した、英雄のよう。
私は、洞察力には自信がある。
元々、人からの悪意をよく惹きつけていた私だから、そういう事は敏感に感じ取る。
この人からは確かに悪意を感じる。でも、それは特別なことじゃない。
この人にとって、世界はすべて悪で、同時に善なんだ。
判断基準は簡単ね。

『愉しめる』か『愉しめない』か。ただそれだけ。
私の事は、決めあぐねているのね。

……なら、どうすれば愉しませてあげられるのかしら？

（……あら？）
どうして私は、彼を愉しませたいと思っているの？
確かに彼は危機的状況だった私を助けてくれた。
でも、それだけでときめく程、私はロマンチックな女じゃない。
それどころか、これ以上の面倒事には巻き込みたくないもの。ここは普通、怒らせてでも私から離すべきよ。

だって私はどうせ海外留学をするんだもの。日本に蟠りを残したって、問題はないわ。

矛盾した自分の思考に混乱しつつ、私は彼の目を見る。
ちょうど、目があった。

「万死に値する」
「へ？」

いきなりで少し戸惑った。
なんで今？　とか、何故その一言？　とか、色々疑問はあるけど……。
（目を見たのがダメだったかな）
彼は自分をギルガメッシュと名乗った。
それは古代メソポタミアの王の名前だ。
つまり、彼は自分が王族だと名乗っているも同義。
（王に家臣は跪く。確か、顔を上げちゃいけないんだったかしら？）
つまり、目を見るのはタブーだったわけね。
気を付けないと。

……だから、どうして私は彼に気を使おうとしているのよ!?

何度も自問自答を繰り返し、何度も何度も肯定し、否定した。

でも、結果は変わらない。
（私は、自分より年下のこの子を、小さな王様を、愉しませたい？）
これじゃ、彼の言った通り、私はただの道化だ。
（でも……そういうのも、悪くないかも）
ＩＱ２００超えの天才児。そう呼ばれて、大人すら並び立たないくらいの上に立っていた私が、まさか年下の子の下に就くなんて……誰が信じるのかしらね？

今まで私を認めようともしなかった同年代の子供が、もっと下の子供に傅く私を見たら、どんな反応を示すのだろう。
……天才の私にも予想できないわね。

（悪くない……ううん。いいかも）
数多くの難問を解いてきた私が、答えの予想すらも難しい問題を提示された。
これは、挑戦するしかないじゃない。

……それに。

（ギルガメッシュ君の……王としての行く末も、気になるわね）

いままで。ただ歩くだけの作業でしかなかった人生という小さな道に、とても小さな花を見つけた気がする。
こんな悲劇みたいな事件で、ようやく生きることの目的みたいなものを見つけるだなんて、世界は随分と意地悪ね。

（この問題、解いてみせるわ。私のこれからと、貴方のこれから。一体、どんな王道を歩むのか）

冷静になると、色々おかしくて笑いがこみ上げてきてしまったのは誤算だったわ。

ｓｉｄｅ　ギル

「ふふっ、ふふふ……」
外見は上から目線で少女を睨み、内心はアワアワやっていると、ほ

んの僅かながら少女の口から笑い声が漏れた。
「……何を笑っている。無礼な奴だな」
「ご、ごめんなさい……でも、なんだか面白くって……アハハハ！」
必死に笑いを抑えて涙目になった少女は、ついに抑えきれず声を上げて笑う。
「……どうやら斬られたいようだな」
「ほ、ホントにごめんなさい！　……ふぅ、ふぅ……はぁ。……ウルクの偉大なる王よ、この無礼、どうぞお許し下さいな」
そして少女は、現代社会ではほとんど見ることなどない、綺麗な礼と、本当に王族に対しているような言葉遣いで謝罪を述べた。
……最後の「な」に悪意が見え隠れするがな。
「ふん、やれば出来るじゃないか」
「身に余る言葉でございます」
俺の口調に合わせて喋る少女。うーん、これは一体どういうことだろう。
まあ、俺ごときに女の子の考えはわからんし……取り敢えず、ずっとここに居る訳にもいかんか。
「……貴様の不格好な礼で多少は鬱憤も晴れたわ」
「あ……」
身を翻し、下り階段に向かう。
後ろから少女が追って来ることが音で分かった。
「あ、あの……あの人達は……」
少女が、後ろを気にしながら俺に尋ねる。
……忘れてた。どうしよう。
「捨て置け。どうせ再起不能にした連中だ。気にするだけ時間の無駄であろう」
おい、何やったんだ俺。
「そう……ですか」
そんな俺の言葉に、僅かに嬉しいような悲しいような顔を見せる。
……まあ、襲われた張本人だし、色々複雑な感情だろうな。

「貴様、名をなんという？」
「あ、私ですか？」
「そうだ。貴様は我が認めた道化だからな。我に仕えるというのに、我が名を知らないでは示しがつかん」
仕えることが決定してるんだが、これはどういうことだ、おい。
まあ、この少女自体が否定してくれるし、流石に慢心王な俺も、無理矢理にものにはしないと信じたいが……。
「私は……アリサ。アリサ・ローウェル。偉大なる王に仕える道化ですわ。……ギルガメッシュ様」
「……そうか。覚えておくぞ、道化」
「恐悦至極にございます」
まさかの認めちゃったよ！　どうすんのこれ!?

「城が汚れた。まずは新たな城を探すぞ」
「でしたら、そこの角を曲がった先にある廃ビルはどうでしょう。立地的に、この辺りでは最高の日当たりです」
「大儀である。では、そこに行こう」
こうして、（勝手に）配下が出来た俺は、いつもとは違った、新しい一日を迎えるのであった。

（本当は海外に行かなくちゃいけないんだけど……いいや。向こうの

学校の誘いは断ろ♪）

少女が抱く気持ちは、恩義か、尊敬か、それとも……。

それは本人しか知らぬ事。

「あ、私、週休８日を希望します」

「よかろう」

（いいのか!?）

3ギル目　不思議な横槍

子供達の無邪気な笑い声をＢＧＭに俺は目を覚ます。
「……チッ、煩わしい雑種共が。我の眠りを妨げるなど万死！」
▪
どうやら、目覚めは好調のようだ。
ここはいつぞやの海鳴臨海公園……にある、黄金に輝くドーム状の遊具の中。名前わからんけど。
一昨日辺りから、俺はここで寝泊まりしている。
……ん？　廃ビルはどうしたって？
赤い汚れがこびり付いてしまった元居住は戻りたくない。
その次に見つけた廃ビルだが、そこは確かに条件は良かった。
壁も窓もあるし、まだ使えそうなデスクとか残ってたし、日当りは最高だし。
……でもただ一言、ただ一言だけ言わせてもらうと……。
「暑い」
現在夏。まさか壁があるだけでこうも気温が変わるとは思いもしなかった。
クーラーも扇風機もない今、暑さというのは何者よりも手強い敵だ。
だから、その廃ビルは早々に出て、住居が無くなった俺は渋々この公園に舞い戻ってきた次第である。
……何故か、どっかの配下が慢心した王らしき誰かを探し回っているような気がするが気のせいだろう。

「……またいるのか」
床がヒンヤリとしていて心地が良い、名も知らぬドームの中。俺は開いた穴から顔を覗かせる。
視線の先にはブランコを漕ぐ少女の姿。
……そう、例の高町なのはという少女だ。

俺は、まだ彼女に話しかける勇気がない。

……いや、普通そうだよね？　だっていきなり俺の嫁とか言っちゃったんだよ!?
「……ふん」
あと、いつもは自分勝手な俺の体も、今回は何故か大人しくしているため、きっとこの選択は間違いではないはずだ。
……にしても。

「一体いつまで我は退屈せねばならん」
ほんと、平和だなぁ……。
今はなのはちゃんに見られたくないので迂闊に出られないし、面白そうな事探しに行こうと思っても難しいんだよ。
暇を潰すには、今この場で出来そうなことに限られてるんだが……何も持ってない俺にできる楽しいことなんてないよなぁ。

なんか、面白いものでも〝出せない〟かなぁ……。

ポツリとその言葉を放ったその瞬間……時空が、歪んだ――。

ｓｉｄｅ　なのは

――うそつき。

なのははもう、何度目かもわからないその呟きを漏らす。

――うそつき、うそつき。

ブランコを一漕ぎする毎に、そう呟く。

――うそつき、うそつき、うそつき。

「……うそつき」

最後に呟いて、なのはは無言でブランコから立ち上がる。

……俯いた顔を正面に向けるけど、そこには誰もいないの。

「……お城に連れてってくれるって、言ったのに」

今日はもう帰ろう。ここに居ると、よくわからないけど胸が痛くなるの。

そう思って、一歩前に踏み出す。

その瞬間、名前はわからない金色のドーム状の遊具に開いた穴から、金に輝く光が漏れ出して……。

……大爆発を起こしたの。

「な、なんなの!?」
「ごほっ、ごほっ……な、なんだ？　何事だこれは？」
モクモクと煙を上げる遊具の中から這い出してきたのは、見間違うことのない、金色の髪をした偉そうな男の子だったの。
「……ギル……君？」
理解したと同時、なのはは走り出していた。

side　ギル

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！
「我の目の前に金色の次元の裂け目が出来たと思ったら何かが高速で飛んで地面に突き刺さって爆発した」
な……何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何が起こったか分からなかった……。
「ごほっ、ごほっ……な、なんだ？　何事だこれは」
爆発で巻き上がった砂煙から逃れようとドームを這い出す。
……結構激しめな爆発にもかかわらず、ダメージを受けてない俺の体と名も知らないドーム。スゲェ。
「……何が起きたにせよ、土煙が収まるまで中には入れんか。……しかし、今の現象は……？」
何が起きたのかさっぱりではあるが、まずは原因の究明をして……。
常識の外側の出来事に気を取られていた俺は、背後からの気配に気付けなかった。

「ちぇりお！」
「ぐふっ!?」
背骨を貫く一撃が、俺の全身に響き渡る。
……まあ、あまり痛くないんだが。
「思い上がったな雑種。その手癖の悪さはもはや救いきれん愚かさだな……うつけもここまで来るといっそ清々しい」
「ふんっ、ギル君が悪いの！　あとなのははうつけじゃないもん！」
「ギル君はやめろ！」
振り返ると、それはやはりというか……怒った猫のように、側頭部の二本の尻尾を振り回しながら栗色の少女が頬を膨らませていた。
「……うそつき」
「我は嘘はつかん」
「……うそつき」
「くどいぞ雑種」
「……」
プクっと頬を膨らませるなのはちゃんと暫く睨み合う。
俺の方は無表情で、なのはちゃんは「むー」と声を漏らしながらツインテールをピョコピョコと跳ねさせて。
１０秒後には根負けしたのか、「ふんっ」と口をへの字にしたなのはちゃんがそっぽを向いた。
「諦めが随分早いな」
「違うもん！　嫌いなギル君の顔を見たくないだけだもん」
「ギル君はやめよ」
「ツーンなの」
今度は無視を決め込むつもりか。……なんだこの可愛い生き物。
「フハハハハ。運が良かったな雑種。今の我は機嫌がいい。……よかろう、暫し童女の戯れに付き合ってやる」
「……」
なのはちゃんは答えず、頬を更に膨らませるだけだ。
……ふむ。
「プシュルルル……って、なにしゅるの!?」

パンパンの頬に指を突き刺せば、面白いように空気が漏れる。
手で頬を抑えながらなのはちゃんは耳まで真っ赤に染まっている。

「やはり貴様は面白い！　しゅるの！　か。しゅるの！」
「にゃぁあああ!!!　最低！　外道！　イジメっ子！」
「フハハハハハ!!!　至高！　王道！　イジメっ子！」

楽しそうで何よりです。

「鬼！　悪魔！　ギル君！」
「王！　古代王！　英雄王！　ギル君はやめよ！」

子供っぽい言い合いはいつまでも続き、ついに13往復目に差し掛かったその時。

「おい！　お前は一体何してるんだ！」

男とも女ともつかぬ、なんとも言えぬアルトの声が公園に響き渡った。

……先程までの和気藹々とした子供の喧嘩の空気は引っ込み、今は、かなり剣呑に澱んだ雰囲気が場に立ち込めている。

それは、俺と言い合っている途中のなのはちゃんの肩を掴んで、庇う様に背に隠した1人の少年と、何より……。

「……」

この、如何にも機嫌を損ねたといわんばかりに、凶悪そのものの面構えをし、背後からドス黒いオーラが出ている(ように見える)俺……いや、我のせいだろう。

「……お前、この子に何をしていた」

睨みで人を殺せそうな程の殺気を放つ我に対し、勇気あるその少年は尋ねる。

……まあ、気持ちはわからんでもない。

さっきまでの状況。本人達はともかく、傍から見れば、確実に俺がなのはちゃんを泣かして笑っていたんだもんな。

それは、今は困惑したような表情だが、さっきまでのなのはちゃんの涙目の表情を思い出せば理解できる。

……俺は絶対ニヤニヤしてただろうし。

ただまあ、俺が理解したところで、実際に反応を示すのは……。

「貴様、我の道楽の邪魔をしておきながら、更に罪を重ねるか。もはや言い逃れはできんぞ雑種」

我、の方なんだよなぁ……。

「道楽？　女の子を悲しませて何が道楽だ！」

「思い上がるなよ雑種。我は人類最古にして唯一の英雄王。王の行動は常に正しく、そして偉大！　我に泣かされる女がいるとは随分と幸せなことではないか。きっとそやつは感涙のあまり更に涙を枯らす事だろうな」

「泣かされて嬉しい訳ないだろう！」

「それは貴様の詭弁であろう。偉大なる我の言葉に感激を受けぬ者はおらぬ」

相手は正しい事を言っている。……だが、こちらは正しさを「作ってしまう」慢心王。……これ、どう収拾付けるんだ？

明らかに俺が引くのが正解なんだが……この体は素直に引かないだろうな。

……というか、ここで引ける様な体ならこんな苦労しねえよ。
「お前のせいでこの子は嫌がっていたぞ！」
「さっきの問答は単なる暇潰しよ。嫌がっていたのは、そういう素振りを演じていただけだろう？　そいつは我の認める〝道化〟だからな」
「……やっぱ嫌いなの」
「ほらみろ！　やはり嫌がってるじゃないか！」
あぁ……どんどん深みに嵌っていく……。

修羅場か？　これが修羅場ってやつか？　いや、今の俺もお前らもそんな年じゃねーだろ。

「ええい、煩わしい！　さっきから何なのだ貴様は！　親切に問いに答えてやれば不躾にも否定しかして来ぬではないか!!　学が無いにしても無礼過ぎるぞ！」
「黙れ！　お前みたいな人を傷付ける事しかできない奴を、俺は絶対に許さない！」
「……ソーダソーダ」
「おい、小娘ェ！　貴様今どっちに付こうか悩んだ末、渋々そっちに寝返ったな!?」
「べーっだ」
「大丈夫、俺が君を守るから」
「……雑種ゥ！　汚い手で俺の嫁に触るなぁ!!」
「んにゃ!?」
「お前……やっぱりテンプレか……！」

あーあー、ここは昼ドラですか？　そうか、この世界の原作は昼ドラか。
……こういうドロドロは、俺が求めたものと違う。
「貴様、どうやら断罪されたいらしいな」

「やれるもんならやってみろよ……！　俺はこの日まで、ずっと努力してきた！　ただ胡座をかいていただけのお前には負けない！」

なんで俺、努力してない設定？　いや、してないけどさ。

胡座じゃなくて、足組んで頬杖ついてたけどさ。

「まだ未完成だけど……でもやるしかないか……」

なんか少年がブツブツ言ってる。あぁ……やっぱ修羅場とか苦手だわ。

どうせあれだろ？　このあとそこの〝木の陰〟から。

「左手に『魔力』を……右手に『気』を……」

この泥棒猫！　って、新しい女キャラとかの……。

「混ざれ……混ざれ……」

〝横槍〟が入るんだろう？

「で、できた。練習の時以上だ！　よし、これでお前を……ゴフッ!!」

「……ん？」

「……え？」

……。

〝木の陰〟から、〝槍〟が飛んできました。

「……興が削がれた」
仁王立ちして腕を組む俺は、飛んできた槍が金色の粒子に変わっていくのを眺めつつ、倒れ伏す少年に注意を向ける。
……死んでないよね？
「ぐっ……うぅ……」
あ、大丈夫だ。死んでない。
「ふん、今回は仕留め損なったが、次はこうはいかんぞ。次会う時まで覚えていろ。雑種」
この俺、瀕死の相手に対しても変わらずこの調子である。
……どこか小物臭い捨て台詞だったのは、黙っておこう。

そして、背を向けて公園を去る威風堂々とした俺の姿。

公園に残ったのは、痙攣している少年と、未だ呆然としているなのはちゃんだけだった。

……で、結局あの槍はなんだったんだ？
「不思議な事もあるものだ。やはり世界は我を飽きさせない」

4ギル目　我は何をしても一流

海と山に挟まれた、自然と共に生きる街。海鳴市。

そこは……不思議な出来事がたくさん起きる、不思議な街。

あるときは……女児誘拐事件の容疑者として疑いがかかっていたとある男性集団が、取り壊し予定の廃ビルの上層階で、半死半生の状態で確保されたり……。

またあるときは……子供の憩いの場『海鳴臨海公園』で、名前も知らない黄金のドーム状の遊具の内部で、謎の爆発テロが起きたり……。

そのまたあるときは……前述の爆発テロと同日、同じく海鳴臨海公園で酷い打撲痕を残した少年が発見されたり……。

そして今日もまた、海鳴には不思議な事件が溢れている。

［そこの君！　止まりなさい！］

けたたましいサイレンが、早朝の静かな街に響き渡る。

音の発生源は高層ビルの立ち並ぶ海鳴市中心部。

まだ車通りの少ない道路を、3台のパトカーが赤く点滅しながらサイレンを鳴らしていた。

パトカーの前を走るのは一台のバイク。

速度違反か、別の何かか、とにかくそのバイクは警察に追われてい

る。
「止まれと言われて……素直に従うかっての！」
『いえ、常識的に考えれば止まるべきかと』
「そうするとアンタは没収されて二度と帰ってこないかもね」
『何をしているのですか。もっと早く逃げますよ』
「最初からそういえばいいのに。……でもこれならどうにか間に合いそう」
『寝坊さえしなければ、こうしてオーバースピードで走らなくて済んだのですけどね』
「あ？」
『朝に浴びる風は気持ち良いものです。この気持ちを味わうために寝坊したマスターナイスです』
　その声は、乱暴な口調にしては随分と高く、鈴の音色を連想させた。
　機械的な黒いラインの入った、赤いライダースーツに身を包み、流線型のフルフェイスヘルメットを被るそのライダーは、信じられないことに、自身の跨がるバイクと会話をしていた。
「よっしゃ、やってやる。……この追いかけっこは楽しかったけど、そろそろ決める！」
　そう言い、バイクの側面にドアのように付いているハンドルのグリップを回す。
　すると、白いラインの入った赤いバイクは、目に見えてそのスピードを加速させる。

『スピードカウンター、１２に到達』
「いいね！　今日のフィールも絶好調！」
『こんな所で過去最高速度を記録するとは、我ながら情けないマスターです』
「あん？」
『素晴らしいです。流石私のマスターチョーパネェ』
　バイクの熱い手のひら返しに気を良くしたのか、分厚いヘルメットの下でライダーの頬が緩む。

「当然。この私とアンタが揃えば、追いつける奴はいないよね」
『勿論です。なんたって私は神製の超高性能デバイスですからね。誰が乗ったとしても世界最高の結果を残す事などもはや……』
「あん？」
『全てはマスターのお力にほかなりません』
どうでもいい会話をしているうちに、バイクとライダーの奇妙な2人は、3台のパトカーを振り切ってしまっていた。
「『ワンターンスリーキルゥ……』」
赤い線を残しながら、バイクはビルの間に消えていった……。
その向かう先に、金色の少年と白い少女がいることは、果たして偶然か、必然か……。

ｓｉｄｅギル

「……思い出した」
ビビッと脳裏に電流が走ったのは、両手に持つリンゴを選定していた時だ。
「あん？　今までのツケの分、ようやく思い出したか？」
「たわけ。貢物に返礼を求めるなど常識がなっとらんぞ」
「貢物じゃねーよ商品だよ！　しょ・う・ひ・ん！」
「少し黙っていろ」
「お前ほんとにムカつくなぁ!!」
とりあえず右手に持っているリンゴを齧り、左手のはポケットにしまい、歩き出す。
「……」
背後からの視線は気にせず、俺は脇目も振らずに目的地に向かった。

俺が思い出した事とは何か。

それは〝原作知識〟の一部である。

「ここが、『聖祥大学附属小学校』か。……意外に規模が大きいではないか」

そう。「この物語の主人公が私立聖祥大学附属小学校に在学している」という原作知識。

……それさえわかればあとは、この学校に通う生徒を調べて、主人公っぽい奴を見つければいい。

俺は踏み台らしい行動をしなければ殺されるらしいからな。なるべく早くターゲットをロックしておかなければ、いつ死ぬかわかったもんじゃない。

この世界のタイトル……えーと、なんだっけ？「魔法少女ギュウカルなのか？」だっけ？

いや、焼肉は関係ないな。……とりあえずその……なんだ。女子だ。きっと主人公は女子だな。魔法少女ってくらいだし。

この学校に通う女子に怪しい奴がいないか調べる。これでいいんだ。

……今は生徒の姿が見えんな。流石に授業中か。
「……ふん、待つのもまた一興……か」
アンパンと牛乳はないが、ドラマの刑事よろしく、張り込みでもしてみますかね。
「我は何をしても一流。故に張り込みも一流だな。フハハハハハハ！」
……周囲の変な視線に気付かず大声で笑う俺。……張り込みの意味を分かってるのか？

side　アリサ

どうも。天才少女のアリサ・ローウェルです。

私が誘拐されたあの事件から5日程経っているのだけれど……その間、留学の取り消しとか、色々忙しかったわね。
両親、教師、向こうの学校の担当者。全員にそれっぽく言い訳をするのは、少しだけ疲れた。
あと、私が仕えることになったギルガメッシュ様も、一日で行方不明になるし。
……私、あの子の事何も知らないから、手掛かりもないのよね。
……どうしよう。
この街に住んでることは多分間違いないけれど……ほんと、あの性格のおかげで、全然行動が読めないわ。
……どこかの公園で寝泊りしてても不思議じゃないもの。
定番は、名前がよくわからないドーム状の遊具の中ね。あそこは住居として成り立ちそうだわ。

まあ、そんな冗談は置いといて、本当に、どこに消えちゃったのかしらね。

そんなこんなで、外面上は納得したふりをして、内心不満だらけの両親や、我が王のことなど、いろいろな問題を抱えたまま、私は5日ぶりの学校へ戻ってきた。

『私立聖祥大学附属小学校』。私が通っている学校のこと。因みに私は4年生よ。

特にいい思い出があるわけでもないし、私の知識を鑑みれば、学校で学ぶことなんて全くこれっぽっちもないんだけど……日本には義務教育っていう面倒くさいシステムが設けられてるの。こればかりは『天才』の肩書き程度じゃ覆せないわね。残念。

それで、特に何をするでもなく自分の教室に入る。

……あら？　少し教室内の様子がおかしい。

いつもは私が入ってきた途端に教室全体のざわめきがピタっと止まる。その滑稽な状況がこのクラスの名物になってたし、私としてもその異様な光景を見るのが楽しみだったのだけど……。

クラスメイトたちは、私が入ってきたことに気付かないか、気付いてもチラ見するだけで、何かの話題で盛り上がっている。

よく耳を澄ませていると、「転校生」とか、「このクラス」という単語がちょくちょく聞こえてくる。

……このクラスに転校生ね。だからこんなにクラス全体が浮き足立ってるのね。

今までは私が（悪い意味で）注目の的だったのに、嫉妬しちゃうわね。

私の陰口だったものが、名前も知らない誰かの噂話に塗り替えられている。地味な嫌がらせをして私の反応を伺っていた人は、窓から校門を覗いて転校生らしき人物を探している。

……今日は机の中に何も入ってなかったし、落書きもされてなかったし、物もなくなってなかったし、なんだか学校に来た意味の８割を失ったわ。
犯人特定とか、物品捜索とか、学校の授業よりは何倍も楽しめるというのに……。

「もう時間だぞお前ら！　全員席に着けよ！」
落ち込んでる間に時計の針は随分と進んでいたのか、教師が入ってきて騒々しい場を収める。
体育会系の暑苦しい男性教師だ。
そして、私に海外留学の話を持ちかけてきた人でもある。
珍しいことに、クラスの生徒が虐められていることに対して熱心に解決しようと取り組むような人。
私が大事にしたくないって言ったから、そんなに大きな動きは見せていないけれど、今回の海外留学、私をこのクラスから逃がそうとする魂胆もあっての事なんじゃないかと思っている。
熱血とか青春とか、バカ真面目な性格とかしてるけど、案外頭は回る人みたいで、私はあまり嫌いじゃない。
「よーし、先生の言うこと聞いてくれるいい子達は、先生大好きだ！
さて、早速だが、今日このクラスに新しいお友達が増えることになった！」
その一言で、一度静まったクラスが再度湧き上がる。
そして、先生の一喝でまた静まる。……ほんと面白いわ。

「じゃあ、入ってもらおう。いいぞ」
先生の呼びかけで、ドアが開く。
そこにいたのは、女の子だった。
ほぼ赤に近い濃い茶髪で、サイドにはねたショートカットだ。

しかし、前髪だけがとても長く、真ん中は楕円形のカーラーのようなもので巻かれ、前髪の端の方は、M字になるようにワックスか何かで固められている見たい。
表情は凛とした雰囲気を持ち、茶色の瞳はキリッと吊り上がっている。

「はじめまして。十六夜流星です。好きなことは機械いじりと走ること。人生の目標は早さを追い求めることです」
十六夜流星。珍しい名前だから覚えておくことにした。趣味も目標も、なんともまあ将来はレーサーにでもなるつもりかという物で、あまり女の子らしくはない。
……でも、人生の目標は、私にもあるんだよね。

私と〝彼〟の歩む道の観察。将来どころか現在進行形で私は臣下という、男女関係なくヘンテコな役職についてるし、彼女のことを言える立場ではなさそうね。

「これから同じクラスでお世話になります。よろしくお願いします」
「よし、それじゃあ十六夜は……アリサの隣が空いてるな。あの長い金髪の隣に座ってくれ」
「分かりました」
ちょっと、どういうことかしら？　これじゃ彼女、私の巻き添え食らうわよ。って、何その「頑張れ！」って顔、これを機にみんなと仲良くなれって？　やっぱあなた馬鹿だわ。

その後、私を避けて十六夜さんに近づかないクラスメイト達を見て、『転校生が質問攻めにされて困り果てるイベント』が回避されたということに気付き、あの熱血教師をまた策士認定したことは、あまり関係のない話である。
「……アリサさん、だっけ。これから宜しくね」
「……アリサ・ローウェル。よろしく、十六夜さん」

それと、私に友達と呼べるものができたのも、大きな誤算だった。

ｓｉｄｅ　ギル

「……放課後か」

結局俺は、今日一日中校門前で立ち続けていた。

年齢故か、通行人からは多少変な目で見られはしたが、不審者扱いはされなかった。

そして、一度も校舎から目を離さない俺の精神力や、立ちっぱなしでも疲れを感じない体力に、我ながら驚かされていた。

……そういえば、前の誘拐事件の時も、前世じゃありえないくらいに強かったな……。

向かって来る男達を、苦戦もせずにあしらう自分を思い出した。

……この体、俺の思っている以上に、前世とはかけ離れているらしい。

今度、自分の出来ることと出来ないことを調べてみようと思う。

まあ、そんな自分への考察はどうでもいいことで、メインは今から家に帰るために校舎から出てくる生徒を見張ることだ。

……外見で分かればいいのだが、そうじゃなければもっと別の方法を探せばいいか。

とにかく、早く主人公を見つけて踏み台らしい行動をしなければ、俺は殺されてしまうんだ。

さあ、全力で監視をしようか。

学校が終わって、一刻も早く家に帰ろうと出てくる一群が現れた。

これは無視。主人公……さらに女子の主人公ともなれば、明るくて学校での評判も良く、友達に囲まれている社交性の高い少女なのだろう。
放課後は友人と楽しく喋りながら、ゆっくりと校舎から出てくるものだ。
間違っても、学校より自宅の方が楽しいと思っているような人格ではないだろう。

次に、習い事があるのだろうか、道着や竹刀など、他の人より若干荷物が多い生徒が増えた。
ここは要注意だ。習い事をしている魔法少女がいても不思議じゃないからな。

全ての人物に目を光らせ、地味に人間離れしている動体視力を披露しているわけだが、そんなことはお構いなしに目を配らせる。

そして、ゆっくりと校舎を出てくる2人の人影を見つけた。
まず目についたのは2人の髪型だ。
1人は腰より長く、太ももまである長い金髪の少女。
1人は、赤いショートヘアで、前髪が変わった形をしている。
……この街の住人は髪の色が逸脱しているため、そこで判断はできないんだが……あの髪型は明らかに他のやつらとは何かが違う。
そう思って、顔を見ると……。
「ん？　道化？」
それは、俺の配下となっていた少女、アリサ・ローウェルだった。
なるほど、あの時はあまり気にしなかったが、あのアリサ。どうやら他の子供とは何かが違うようだ。

誘拐されるなんてトラウマレベルの事件にあったというのに、次の瞬間にはケロッと俺に跪いているし、精神年齢も知識も同年代とは比べ物にならない程に思えた。

となると、もしかしたら彼女こそが主人公の魔法少女なのではと思う。が、ふと浮かんだその考えは直ぐに否定した。
まず魔法少女なら誘拐される前に自分で何とかするだろ。と。
もしこの世界が〝原作〟とかいうものその通りに動いているのだとするならば、彼女は謂わば、〝主人公が助けるため〟に用意された誘拐イベントの被害者。
まあ、俗に言う〝主人公の親友〟ポジションなのではないかと思う。
……うん、この考え、あながち間違いじゃないと思う。（出自不明の自信）

……とすると、この世界の主人公は、彼女と仲の良さそうな……。

「あの赤い女か。見た目は上物。……ふむ、偽りとは言え、我が嫁と呼ぶに値する」
アリサの隣にいる少女。あの子に対して、踏み台的な行動をすればいいはずだ。

「あ、貴方……！　王っ!?」
「ん？　どうしたの、アリサ……って……ギルガメッシュ？」
２人の前に出て、俺はまず一言。
「よお、我の嫁」
さあ、俺のために、俺は踏み台となろう。

この主人公から、嫌われるために。

ｓｉｄｅ　アリサ

いた。

我が王が、いた。

今までどこを探しても見つからなかったのに、あっさり、私の目の前に現れた。

そして……。

「よお、我の嫁」

ギルガメッシュ様の最初の一言は、まったく理解不能のセリフだった。

しかもそれは……。

「そこの赤い女よ、俺のものになれ」

私ではなく、隣の十六夜流星に向けられたものだった。

「……は？」

十六夜さんは十六夜さんで、訳が分からないといった顔をしている。

見た感じ初対面のように感じる。……けど。

私は見逃さない。

貴女はさっき、彼を〝ギルガメッシュ〟と呼んだ。

それは、貴女が彼の事を知っているということ。

どういうことなのか、しっかり説明してもらわないとね……流星。

転校生の友達の手首で、赤い宝石の付いた腕輪がキラリと光った。

5ギル目　遊び心の転生者

『目覚めなさい』
「……ん？」
目を覚ました私が見たのは、真っ白な天井。
「……知らない天井だ」
そう言いたくなるのは、昔見たアニメの影響ね。
「……えっと、ここはどこかしら？」
周囲には何もない、真っ白な空間。
状況が理解できず、私は必死に記憶を呼び起こそうとしていた。
『ここは神の居城じゃ』
そして、そんな私の目の前に、布一枚を纏ったような格好をしている、ヒゲの長いおじいさんが現れた。
「……ヴァルハラ？」
『いーや、どちらかといえば、『幻夢境（ドリームランド）』じゃな』
おじいさんがそう告げると、景色は一変し、青空にたくさんの島が浮いている風景が、私を取り囲んだ。
一瞬にして起こった非現実的な出来事に目を瞬かせていると、おじいさんが私に近づいてくる。
……その姿は、とても見慣れたものだった。
「……カップ麺早食い王？」
『失礼な奴じゃな。わしはノーデンじゃ』
その姿は、私が趣味でやっているカードゲーム、『遊戯王』のモンスター、『旧神　ノーデン』のそっくりさんだった。
『わしは神じゃ』
「知ってる」
『……反応が薄いのう。もう少し驚いた顔が見たかったのじゃが……』
本当に残念そうに落ち込むおじいさんに、なんだか居た堪れなくなる。
「いや、だって、カードの実体化なんて遊戯王の世界じゃ日常茶飯事だ

し」
『アニメに毒されすぎとりゃせんか!?』
いや、だって……ねぇ?
「それで、そのノーデンが私に何の用? まさかカードの精霊とか言わないわよね」
こんなおじいちゃんが私の精霊だなんてイヤね。どうせならヴェーラーちゃんがいいわ。
『ホンに失礼なやっちゃ。……もうよい。単刀直入に言うが、お主は死んだ』
「へぇ、そうなの……って、え?」
死んだ? 私が? ……なんの冗談?
『お主は、遊戯王のショップ大会が終わったあと、対戦相手の少年が帰りに車に撥ねられそうになって、それを助けるために死んだのじゃ』
「……そうなの。そう言われれば……」
確かに、今日大会があったことは覚えている。
毎週通うカードショップで、いつもの人達に加えて新しい小学生のプレイヤーが1人いたことも覚えてるし、その子が帰りに、道路で信号無視の車に轢かれそうになったことも……。
……あれ?

……そのあと、私は。
『その子を庇い、車に轢かれたのじゃよ』
「……そっか」
そうだ。それで私は……。
「じゃあ、ここは?」
『言ったじゃろう? ここは神の居城。わしの家じゃ』
神……死んだ私は、あの世に行くってことなのかな。
『いやいや、お主はあの世には行かんよ。わしはお主が気に入った。どれ、最近有名な転生でもさせてやろうと思うてな』
「転生?」
それは、よく言うファンタジー的なあれ?

「特典つけたりする奴？」
『つけたりする奴』
「なんでもいいの？」
『何でも良い』
「わーい」
『全然喜んでないのじゃー』
　なんかめんどくさそう。
「でも、くれるって言うなら貰ってあげる。そうね、この３つでどう？」
『即決かい。……この内容じゃと、多少制限もかかるが良いかの？』
「もちろん。リミットレギュレーションなしでデュエリストは名乗れないわ」
『本物じゃのう』
　そんな軽いノリで、私は転生することになった。
『ほれ、付けてやったぞい』
「はいはーい。それじゃ、楽しいデュエル道を歩みましょうかね」
『あ、リリなのの世界には遊戯王はないぞい』
「……へ？」
『お主の持っておったカードは送ってやるが、デュエルはできぬのじゃ』
「……は？」
『ぐっどらっくじゃ！』
「はぁあああああああ!!??」
　ちょっと！　遊戯王のない世界なんて、私聞いてないんだけど！
　う、嘘でしょ!?　私、何を励みに生きていけばいいのよ!!
　そんなこんなで転生した私は、出来もしないライディングデュエルのためにバイクに情熱を捧げることにしたのでした。めでたしめでたし。

ｓｉｄｅ　ギル

「嫌よ」
彼女の返答を聞き、俺はとりあえず安堵した。
……よし、このまま俺を嫌ってくれれば、とりあえずの目標は達成か。
いや、まだだな……踏み台なら、もうひと押しってところか。
「なんだ、照れているのか？　まあそれも仕方のないことだな。この最古にして唯一の英雄王、ギルガメッシュの寵愛を受ける事になるのだ。照れぬ方が不思議というもの」
「違うわよ」
……あれ。眉ひとつ動かさずに否定された。……これ、ちゃんと悪印象持たれてる？
なんか、適当にあしらわれている気がするんだが。
「ねえ、これはどういうことかしら？」
「道化は引っ込んでいろ。貴様の発言は許しておらん」
「……」
アリサがムッス～～～～っとした顔になっている。が、ちゃんと黙ってくれるあたり、しっかり配下としての立場は弁えているようだ。……いや、そんな自覚持たなくていいんだが。
「……なんで私なの？」
赤い少女が俺に聞く。なんでって……まさか素直に「お前が主人公だからだ」なんて言えるはずないよな……。
……さて、どうするか。
「……ふむ、人に惹かれることに理由が必要か？」
「は？」
くっせェェェェェ!!　なんだこの臭いセリフ！　踏み台じゃねえよこれ！　ただのいけ好かないナンパ男だよ!!
「なんかわかんないけど……随分節操無しなのね。……転生者まで狙ってくるなんて（ボソッ」

少女が呆れたような顔で俯き、ブツブツと呟く。
……相手の反応がわからない以上、次の言葉を続けるのは危険だな。
まずは、次の相手の行動を見てから……。

「私と決闘よ」

……ん？
「……ん？」

……なんだ？　決闘？　なにそれ。血糖？　甘党なの？

「……おい、小娘。決闘とはどういうことだ？」
「私は十六夜流星よ。小娘じゃないわ。……貴方は私が欲しいんでしょ？　私は決闘に私自身を賭けるわ。どう？　悪くないでしょ？」
不敵に笑い、そう告げる十六夜流星。
……うん、全くわからん。
「あら、もしかして自信ないの？」
あっ、あかん……そんなこと言ったら……。
「愚弄するな、この我を誰だと思っている。……いいだろう。その決闘、受けて立つ」
ほらぁ、こうなる。
決闘って言っても、その内容もわからないし、相手の強さだって知らない。
もし、魔法の撃ち合いなんて言われたら、敗北は確実だぞ。
「……その言葉、後悔しないことね。……でも今はダメね。アリサを巻き込むわけにはいかないもの」

「……」
ああ、そうだ。完全に忘れていた。そういえばアリサも隣にいたんだった。
「なんだ道化、いたのなら一声かければ良いものを」
「むぅぅぅぅぅ!!」
……一瞬アリサがなのはちゃんに見えたんだが、気のせいか？
「もう、嫁とか決闘とか……私抜きで面白そうな話を始めないで。……色々説明してもらうわよ。流星、ギルガメッシュ様」
「……っ!? アリサ、コイツのことを……！」
「その話はあとでね。取り敢えず、ここ以外の場所で話しましょう。流石に校門のど真ん中で長話をするのは遠慮したいわ」
言われて気付いた。……これ、凄い視線を集めている。
「嘘、修羅場？」「三角関係？」「あれ、アリサ・ローウェルと転校生だよな？」「相手、まだ幼児じゃない？」「でもあの外人みたいな子カッコよくない？」など、ヒソヒソと声が聞こえてくる。……流石に恥ずかしいな。
「……確かにそうね。なら、どこか公園にでも行きましょう。あそこならゆっくり話し合えるわ」
流星がそう言って歩き出す。俺もそれに付いていく。
……公園と聞いて、何かを思い出しそうになったが、結局思い出せなかった。

「それじゃあ聞かせて頂戴。流星、あなたとギルガメッシュ様はどういう関係？」
「それより、アリサこそギルガメッシュの何なの？」
「……なんでなのははここに居るのかな？」

ところ変わって海鳴臨海公園。ベンチの並ぶ休憩スペースにて、俺とアリサ、流星、そして何故かなのはちゃんの４人が集まっていた。
……位置関係は、並び合う二つのベンチに、俺となのはちゃんが向き合っている。
そして、なのはちゃんの〝両端〟にアリサと流星がそれぞれ座っている。

うん、おかしいだろう？　何故か自然にこうなった。……死にそうな顔してるなのはちゃんには悪いけど、少し我慢してくれ。

（ギル君！　これはどういうことなのぉ!?）
（ギル君ではない。……貴様を巻き込むつもりはなかったんだが……ホイホイ近づいてきた貴様が悪い）
（おーぼーな責任転嫁！　なのははまた勝手にどっか行っちゃったギル君に文句言いに来ただけなのに！）
（わざわざ我の正面に座ったのが運の尽きだ）
（うわぁーーん！　おうち帰りたいよォー！）
なのはちゃんと俺がアイコンタクトで会話しているが、２人は構わずに問答を続ける。

「私の事はどうだっていいじゃない。でもそうね……強いて言うなら、ギルガメッシュ様は私の恩人であり、一生（の忠誠）を誓った人よ」
唇に指を当て、妖艶な感じでアリサが告げる。……なんだその意味深な動作。
「へぇ、そう。私とギルガメッシュの関係は、貴女が知る通り、ただ結婚を迫られているだけよ。〝ただ〟……ね」
流星が、なんでもないような感じで説明する。目は伏して、表情をほとんど動かしていない。……どこか余裕を感じさせる態度だ。
「そう……〝ただ〟なの」

「ええ、〝ただ〟よ（流石に転生者とか踏み台とか、どこまで知っているかわからないのに、教えられないわよね。……というか、アリサはもしかしてこの踏み台に騙されてる？　ほんと、踏み台転生者なんてどうしようもないクズね……）」
「「……（ゴゴゴゴゴゴ……）」」
……2人の背後に、阿修羅と般若が現れたような気がする。
しかし、それは2人に挟まれたなのはちゃんの顔を青くするだけに終わる。
「あ、あの、2人とも落ち着いて……」
「「貴女こそ何なの？」」
「ヒィイイイ!!」
あ、ヘイトがなのはちゃんに移った。
「貴女、当たり前のようにギルガメッシュ様に近づいてきたわよね？　もしかして、彼の従者か何か？　だとしたら私と同じ立場ね」
「違うわね、大方、彼に求婚でもされて困っていたんでしょう？　だから文句を言いに来たのよ。貴女は私の方についたほうがいいわ」
（ヒィイイイ！　どっちも怖いの!!）
実際、なのはちゃんは道化扱いされたり、嫁扱いされたり、どっちの側にもつける立場なのだが……。
まあ、焦りに焦りまくっているなのはちゃんにそんなことを考える余裕はなく……。

「……な、なのはは……ギル君の玩具なの！」

とんでもないことを、口走った。
「……は？」
「……へ？」
「あっ！　ち、違うの!!　ぎ、ギル君がただ、なのはの事なんてその程度にしか思ってないってだけで、べ、別になのはがそれを認めてるとかそんなわけじゃ……！　なのははただ、ギル君の（愉悦の）捌け口に使われたり（口論に負けて）泣かされたりしてるだけで……」

ついでに、全てのヘイトを俺に押し付けやがった……！

「……我が王？」

「……踏み台？」

そして……世にも恐ろしい女の顔が、こちらに振り向いて……。

「「どういうことかしら？」」

鬼が、いた。

「……ギル君ではない」

違う。そうじゃない。

「……その小娘は、まあ、愉快な小動物だな」

「……小動物？」

「……小動物ね」

「しょ、小動物……」

1人項垂れているが、構わず続ける。

「見ていて飽きぬから、最初は飼って傍に置いておこうとでも思ったのだが、存外抵抗が激しくてな。しょうがないから妥協して我の嫁になれと言ったのだ」

「どこをどう妥協したらそうなるの!?」

「やかましい。貴様は喋るな」

「なのは当事者なのに!?」

……うん、やはりなのはちゃんと話していると、周りの空気が浄化される気がする。

現に、威圧感を出していた2人も、大分落ち着いてきたようだし……。

（飼おうとして……妥協して嫁？　ギルガメッシュ様にとって、嫁っ

ていうのはそれほど特別な称号でもないのかしら？　だとしたら……何なのかしら。ここまで感情的になってた私……滑稽ね。これこそ道化にふさわしいわ）
（モブキャラも甚だしい私に対していきなり嫁と言っておきながら、メインヒロインへの扱いが雑ね。もしかして、俗に言うフェイ党とか言う奴？　でも、それなら最初から向こう陣営になるように転生場所を選ぶはずだし……。こいつ、本当に踏み台なのかしら？）

何かを悟ったような顔のアリサと、さも不満があるかのような顔をする流星。
先に口を開いたのは、流星の方だった。

「ねえ、ギルガメッシュ」
「なんだ、嫁よ」
「……。まあ、いいわ。貴方、この世界についてどこまで知ってるの？」
「……なんの話をしているのかしら？」
「アリサにはいつか説明するわ。……で、どうなのギルガメッシュ」
俺は、この質問がどんな意図でされたのか、全くわからなかった。
なんだ、魔法少女って、世界の法則とか、そう言った壮大な設定を抱えてるのか？
で、不自然に近づいてきた俺を不審に思ってるとか、そんな感じだろうか。
「我は世界全ての王。この我に知らぬことなどない」
まあ、どっちにせよ、俺はこう答えるんだろうが。
そう内心で苦笑いをしていると……流星は、こう続けた。

「なら、貴方の世界を見せてみなさい。……フィールド魔法発動『幻夢境（ドリームランド）』」

世界が――――変わった。

まず目に入るのは、見上げるほどの巨大な城。
天から降り注ぐ神々しい光に照らされ、神秘的に輝いている。
そして、周囲に浮かぶ小さな島の数々。
浮遊島というのだろうか。あちらの島に向かうには、空を飛ぶ以外の手段はなさそうだ。

そして、そんな非現実的な世界に、俺と……流星はいた。

「ここなら気兼ねなく話せるわ。なのはちゃんとアリサちゃんは申し訳ないけど、連れてこれなかったわ」

そう言う流星の服装は、聖祥の制服から、黒いラインの入った赤いライダースーツに変わっていて、その左手には、扇型に広がった機械が取り付けられていた。

「……この世界は、貴様が作り出したのか？」
「そうよ。私の能力の一つ、『フィールド』。貴方で言う固有結界のようなものよ」
「我でいうだと？」
「……知らないの？　貴方の外見と名前の元となったゲームでは、結構定番だと思うのだけど」
知らない。ギルガメッシュという名前は転生してから初めて知っ

たものだし、この外見にも原作があることなんて、俺は知らない。
　そんな俺の思考に気付いたのか、流星は困ったような顔をした。
「……なるほどね。貴方、自分で望んでそんな態度を取っているわけじゃないのね」
「何を……」
　しまった、一番バレてはいけない奴にバレてしまった。……このままじゃ、俺は踏み台としての役目を果たせず、死んでしまう！
「……安心しなさい。このフィールドは、とある神縁の地。貴方を転生させた神はこのフィールド内に干渉できないわ」
「なっ、貴様……転生者のことを」
「そりゃ知ってるわよ。……私も転生者だから」
「な……っ!!」

　転生者……だとっ!?　じゃあ、俺が主人公だと思っていたのは……全て間違い？

「……もしかして、気付いてなかった？」
「ば、バカを言うな！　この我が知らぬことなどあるはずがない。何せ我は最古にして唯一の「はいはいわろすわろす」……無礼な、万死に値する！」
　俺の名乗りを遮り、「あははっ」と笑う流星。……なんというか、性格が変わってないか？
「まあ、そんなことはどうでもいいわ。貴方が何を思って私に声を掛けたのかは知らないけど……その、踏み台みたいな態度、続けなきゃいけないんなら、私も付き合ってやるわ」
「……」
「ふふっ、私、こう見えても相手の心情を探るのが得意なのよ（というか、手札にヴェーラーとかオネストとかウサギとか握ってるかどうか知るためには相手の心を読むしかなかったというか……）」
　クールだった流星はどこに行ったのか、今いるのは、無邪気に笑う朗らかな少女だ。

「貴様……一体なんのつもりだ？」
俺の踏み台のふりに合わせて、演技をするメリットがわからない。
俺が失敗して殺されようが、この転生者にはなんの害もないはずだ。

「なんのつもり？　うーん、なんだろ。……そうね、楽しそうだから、じゃないかな」
「楽しそう……だと？」
「そう。楽しそう。私が貴方を〝踏み台だと思い込むフリをする〟。それって、貴方を転生させた……〝神を騙す〟ってことじゃない？最初は遊戯王のない世界なんてつまらない事ばかりだと思ってたけど……神様を騙すなんて滅多にないチャンスよね。この期にやっておかなきゃ、もう二度とできないわ」
そう言って笑う流星を見ていて、俺は思った。

……ああ、そうか。この人……愉悦を求める時の俺と同じ顔をしているのだ。

「ふはっ、フハハハハハ!!　よい、よいぞ！　貴様、我と共に愉悦を求めるか」
「ええ、外道神父じゃなくてごめんねだけど、ここに、『愉悦部』を結成しましょうよ」
「愉悦部！　なんと心踊る響きか！　よかろう。貴様は我の腹心として召し仕えようではないか」
「げぇ、それは勘弁。私、誰の下にも付かない主義だし」
「ふん、その自分を曲げぬ姿勢も気に入った。そのうち貴様の身も心も我のものにしてやる。心して待つが良い」
「わー、たいへんね。奪われないように守らなきゃ」

こうして、よくわからないうちに俺は、志を同じくする同志を見つ

けたのだった。

……踏み台ってなんだっけ。

「ねえ、ギル」
「なんだその呼び方は」
「別にいいでしょ。長いし」
「……ふん、好きにしろ」
「やたっ！　あ、じゃあ……折角だし、ここで決闘しましょう」
「……何？」
「私のフィールドは全て、ライディングフィールドになってるの。だから……バイクレースよ」
「……我はバイクを持ってない」
「いや、あるでしょ」
「だから……何だ、この金ピカのセンスがいいバイクは」
「貴方が今自分で出したんでしょうに……」
「なんだそれは。……ふん、まあいい。こいつは我に使われたいようだな」
「……（自覚なしで使ってるんだ、まあいいや）。よーし、クレナイ。『遊星号』を出して」
『了解です、マスター』
「な、なんだそれは？」
「これ？　私のデバイス」
『初めまして。マスターのデバイスをしております、クレナイと申します。普段は腕輪、セットアップ中はデュエルディスクとなってます』
「そ、そうか……」
「ま、そんなことはいいでしょ。今は目の前の決闘よ。いーい？　勝った方が……負けた方に命令権一回！」
「ふん、よかろう。この我のドライビングテクニック、見せてやる」
「「勝つのは……」」

「「我（私）だ!!!」」

「「ライディング……デュエル！」」

俺達がこのフィールドを出たのは、これから3時間後のことである。

……現実では1秒もかかっていないというのだから驚きだ。

「……なんか飽きちゃった」

「あら、流星。もう帰るの？」

「ええ、アリサは？」

「……そうね、私もそろそろ帰ろうかしら。……なのはちゃんだっけ？　またね」

「へっ？　あ、うん。アリサちゃんも、バイバイ、なの」

ふと席を立った流星が、俺を見る。

「そうだ、ギル。12桁の数字を言ってみて」

「なんだ、藪から棒に……○○○○×××△△△△だ」

「ありがと。じゃあね」

……なんだったんだあいつ。

「……じゃあ、私も帰るわ（ギルって、いつの間にそんな呼び方をする仲になったのかしら……）」

仏頂面で席を立って、アリサが消える。

「……ギル君、今日は一段と疲れたの」

「ギル君はやめよ。……我もだ。こんなに疲れたのはいつぶりか」

ほんの些細な思いつきで始めた張り込みが、まさかこんな形になる

とは思わなかった。

だが……一人でも理解者がいるというのは、存外気が楽なものだな。

慢心王の真似をして、俺は心の中で呟いた。

～翌日～

「愉悦教に寄付を」

「麻婆教に寄付を」

「外道教に寄付を」

「もう二度と宝くじなんて買わないんだからぁあああああああああああ!!!!!!!!」

海鳴の街に、〝徒歩〟で追いかけてくる3人の神父と、〝バイクでの全速力〟で逃げ回る少女の声が響き渡った。

なお、どこかの天才少女が広げた新聞には、１２桁の番号で当たり外れを判定する宝くじの当選番号が載っていて、その一等が、偶然にも昨日十六夜流星がギルガメッシュに聞いた番号と一致していたのだが、それはきっと関係の無い話である。

そう思い、天才少女は新聞を閉じた。

6ギル目　慢心王の食料事情

「握力……雑種どもの8倍と言ったところか……100m走も高飛びも、もはや人間レベルじゃないな。やはり頂点の王たるもの、この程度でなければならない。フハハハハ!!」

よう。俺は今、山の中にある神社の裏手で、自身の身体能力の確認をしているところだ。

最初は、この体妙にスペックいいよな。と言う何気ない疑問から始めたのだが……これが実にいい結果を弾き出す。

まず、普通人には持ち上げられない大岩を、なんでもないかのように持ち上げる。

走れば、10mはほぼ一足で移動できる。

跳躍力も、軽々人を飛び越えられるレベルだし、まさか俺がバク宙を出来る日が来るとは思わなかった。

まあそんな感じで、こりゃ慢心もするわ、ってレベルの肉体を有する俺。

まだ幼い体だし、これから鍛えていけばもっと伸びるかな……って思ったんだけど。

「この我に鍛錬など必要ない」

ですよねー。

努力する慢心ってそれもはや慢心じゃねーよ。

てなわけで、俺はどうやらこれ以上強くなれないらしい。

だけど、今のままでも十分過ぎるくらいに強いし、特に問題はなさそうだ。

「……そろそろ帰るか」

そう言い、俺はすぐ目の前にある神社に入った。

俺は今、誰もいない神社に間借りさせてもらっているのだ。

何故か板目の隙間から雑草が生えているが、「ふん、なかなか根性のあるやつだ」とか言って、慢心王がお気に召しているからよしとしよう。

……そろそろ、どうにか身分を確立させて、普通の家に住みたいな。

……いや、その前に。

「……腹が減った」

食料の調達が、必要だ。

ｓｉｄｅ　なのは

キィ……キィ……とブランコが軋む。

「３６７……３６８……３６９……３７０」

なのはは、一往復ごとに数を数えるだけの機械と化していた。

……退屈なの。

前は、一日中こうしていてもなんとも思わなかったのに、いつからかこのブランコに座っているのが苦痛に思えてきたの。

それもこれも、全部あの意地悪な金髪のせいなの。

金髪許すまじなの。

あの日、家族に否定されていたと勘違いしていたなのはに近づいて、なのはの誤解を解いてくれたギル君。

ギル君と話していると、心の底から殺意が湧いてくるけれど、それ

と同時に別の衝動が湧き上がってくる事も感じていたの。
それが何なのかはわからないけれど……嫌悪感とか、そういうのとは違うことは分かった。
なのはは、ギル君のことをどう思ってるの？
いつの間にかブランコの回数を数え忘れてるけど、そんなどうでもいいことより時間を有意義に使えそうな悩みが生まれたから別にいいの。

「ねえ、こんな所で何をしてるの？」
「……え？」
うんうんと唸って考え事をしていたら、急に誰かに話しかけられたの。
黒髪黒目で、顔立ちは整っているけれど、ふとした瞬間に忘れそうなくらいにパッとしない男の子。
……あれ、この顔、どこかで見たことあるの。……どこだっけ？
でも、折角ブランコに揺られた回数を数える以外の時間潰しを見つけたのに、それを妨害したこの子は万死に値するの。
……あ、今のギル君の口癖なの。
「こんな所で何してるの？　君1人だよね？」
あっと、しまったの。ふとした拍子に忘れてたけどなのは、この子

に話しかけられてたんだったの。

……えっと、1人で何してるのか、なの？　見てわかる通りブランコに乗ってるの。

「……今、ブランコで黄昏てるの」

「あ、そ……そうなんだ。……えっと、どうして1人でいるの？」

急に不躾な質問になったの。1人でいることを責められると、こっちとしても色々答えにくいの。

「……君、1人で公園まで来たの？」

「1人なの」

そして強いて言えば君も1人なの。

「……君、名前は？　僕は上津正義（かみつ　せいぎ）。6歳だよ」

「……高町なのは、同じ年なの」

名乗られたら名乗り返す。どこかの金髪に教えられたことを実践するのはなんか癪に障るけど、でも実際マナーだからやるの。

「そっか……お母さんとかは？」

「仕事中なの」

「……なのはちゃんを一人にして？」

「お母さんは喫茶店の店員さんだから、休日もお仕事あるし、大人が仕事中に子供を一人にしちゃうのはしょうがないことだと思うの」

それが悪いことだとは思わないの。お母さんはお父さんの分まで頑張ってるし、なのははそれを応援したい。

だから、お父さんが退院するまで、なのはは待ってる。

……ギル君のおかげで、なのはは自分のやりたいことをしっかり自

覚できたんだし、やり遂げる覚悟もしてるの。
「……それ、寂しくない？」
「でも、お母さんに迷惑はかけられないから」
かけられない、じゃなくて、かけたくないが正解だけど、面倒だから言い直さないの。
「そんなことはない！」
「にゃ!?」
急に大声をあげられたらビックリするの！　何？　どうしたの!?
「君が我慢する必要はないよ！　子供は親に迷惑をかけてもいいんだ！　だから、なのはちゃんはもっとお母さんにわがままを言うべきなんだ！」
「……（ポカーン）」

なんか、今更なことを凄い熱弁されたの。

子供は親に面倒をかけるもの。親は子供の面倒を見るもの。

……前にギル君に教えて……もらってないな。なのはが自分で気付いちゃった事なの。

「だから、なのはちゃんはもう我慢しなくていいんだ。今からでも遅くないよ。お母さんのところに行って、なのはちゃんの本心を打ち明けるんだ」

なんか、わけのわからないことを言って手を差し伸べてくる……名前忘れたの。
でも、本心を打ち明けるって……なのはの本心はお母さんの役に立つことなの。
それがなのはのやりたいことで、その結果一人になっちゃってるけど、これはなのはが自分で望んだこと。

お母さんも、お兄ちゃんも、お姉ちゃんも、みんな辛くて、悲しくて、とても努力してるの。
それに、今一番辛いのはお父さんだから。
なのはは、家族だから。家族と同じ大変さを背負いたいから、わがままは言いたくない。迷惑をかけるのは、なのはの本心じゃない。
「ほら、俺も一緒に付いて行くから。なのはちゃんは……一人じゃないんだよ」
……なんかもう、言ってることが的外れ過ぎて泣けてくるの。
この子、きっと頭のおかしな子なんだろうな。かわいそうに……
うぅっ……。
「もう、泣かなくてもいいんだよ。さあ、行こう」
「あの、別にいいです」
「……へ？」
取り敢えず、変な人にあったら逃げるようにお母さんに言われてるから、なのははそそくさと公園をあとにしたの。
後には、表情を固めて右手を突き出したまま動かない男の子だけが残ったの。
「……なんか、よくわからないけど気分が悪くなったの。こうなったら、ギル君に何かイタズラでもして気を紛らわすの！」
そうと決まれば、あとはギル君を見つけるの。
なのはは、人で賑わう市内方面に向かって歩き始めた。

side　ギル

「げ、また来やがったな」
「ふん、また来てやったぞ、雑種。さあこの我に貢ぐがいい」
「もうオメエにやるリンゴはねえ！」
「……なにやってんの？」
いつもの様に商店街で食料調達（カツアゲ）をしていると、誰かが俺に声をかけてきた。
振り向くと、そこには買い物袋を下げた流星の姿があった。
「なんだ、貴様か。見ればわかるだろう？　王は雑種からの献上品を受け取る義務がある」
「商品だっての」
「黙れ雑種、今は貴様の話など聞いておらん」
「んだと？　コラ」
「王への敬意が足りておらんな。この雑種は随分と教養がなっておらぬようだ」
「マジでムカつくな、お前……」
「貴様ほどではない、雑種」
「言うじゃねえか……ガキ」
「……仲いいわね、貴方達」
八百屋のおっさんとは短い仲でも無いからな。お互い、どの程度の距離感で話せばいいのかがよく分かっている。
「まあ、同意の上ならそれでいいんだけど……ちょっとギル、こっち来なさい」
「なっ、何をする！　貴様この王に気安く……お、おい！　引っ張るな！」
聞く耳持たぬと言わんばかりに俺の袖を引っ張る流星に連れられ、俺は商店街を離れていった。
「……なんだったんだ？　ありゃあ」

そして、おっさんの呟きは、商店街の賑わいに掻き消えていった。

「貴様、なんのつもりだ。この我をコケにしたこと、理由によっては……「フィールド魔法発動」だから聞けと言っているだろう！」

「『幻夢境（ドリームランド）』」

――また世界が、変わった。

目の前の風景は、フワフワと浮かぶ小さな島々。

そして、大きな城に変わった。

「……またここか。貴様もつくづく芸がない」

「ほっといてよ。ここが一番落ち着くんだから」

「ふん……まあいい。だが、何の目的で我をこの空間に連れ込んだ？」

商店街で偶然会ったから、ってだけじゃなさそうだな。

なんとなくそう思い、俺は流星の事情を聞いてみる。

すると、流星は呆れ返った表情で答える。

「あのね……かの有名な慢心王様が一介の八百屋で恐喝紛いの物乞い何かしてたら、誰でも引き止めるわよ」

「物乞いだと？　貴様、我を愚弄するか！」

「いや、１００％物乞いだったわよねぇ」

「そんなわけあるか！　あれは雑種共からの貢物を受け取ろうとしていただけだ！」

そーだそーだ。決してひもじいわけじゃ無いんだよ。……無いんだよ。

「……まあ、アンタが折れるとも思わないし、取り敢えずそれでいい

や。でもギル。アンタ、そんなにお金に困ってるの？」
……随分ストレートだな、コイツ。
「ふん、この世界は余すことなく我のもの。この世全てが我の玉座であり、財でもある。居住や金銭など、そんな固定概念に囚われる必要性など皆無！」
「あぁ……無いわけね」
「無いのではない！　全てが我のものなのだ！」

流石に往生際の悪い慢心王である。いや、もう諦めてますけどね。ここで折れる俺ならもっと気苦労も減るのに……。
「……はぁ、これは……教えちゃった方がいいのかしら」

未だに「ぐぬぬ」と言いながらも貧乏を認めようとしない俺に、流星がため息をつき、小声でボソリと呟くのが聞こえた。
「……『王の財宝（ゲートオブバビロン）』の、使い方」

その名前を聞いた瞬間、俺は少しだけ……胸の奥に違和感を感じた。
何か……俺に、『何か』が足りないような……。
『王の財宝』……それが、俺の求める『何か』を示すものなのか……。
「……いや、このままの方が面白そうだからやめとこ」
「おい」

何か、とても大切なことが流星の娯楽のために後回しにされた気がする。
「呼び止めて悪かったわね。ほら、お詫びにこれあげるから機嫌直し

て。それじゃ！」
「なっ、待て！　貴様！」

俺が呼び止めるも、流星は「亜空間物質転送装置！」と叫んで、フッと目の前から消えてしまった。……なんだ今の現象は。

消えかかっている『夢幻境』の中で、俺は『デビルコック先生の秘伝ハングリーバーガー！』と書かれたハンバーガーの包み紙をクシャッと握り締めた。
なお、その時俺の手の中から、悲鳴の様な声が上がったような気がしたが、気のせいだと思い込むことにした。
……これ、『食べられる』ハンバーガーなのか？

指を囓られたので捨てました。

数十分後、街中にて。
「あ、ギル君」
「ギル君ではない！　……っと、何だ小娘、貴様か」
「あからさまに残念そうな顔しないで欲しいの！　これでも女の子なんだから結構ショックなんだよ！」
「なんだ、女扱いして欲しいのか。なら我の嫁になれ」
「お断りなの！」

道端でバッタリ出くわしたなのはちゃんと、最早お約束にまでなってしまったコントが開始する。
……だが、今日はあまり調子でないんだよなぁ。できればまた今度にして欲しい。
「面倒な奴だな。嫁になる気が無いのならわざわざ話しかけてくるな。目障りだ」
「ギル君にとって話しかけてくる人＝お嫁さん候補なの？」
「そうだ」
「まさかの正解だった!?」
面倒だから適当に相槌を打っていたら、コントが続いてしまった。
うーん、どうすりゃ帰ってくれるかな。
「我は今機嫌が悪い」
「いつも悪そうだけど」
「……今日はいつも以上に悪いんだ」
「まあ、確かに心なしそう見えるの」
「……ならば我の近くにいたらどうなるかなど明白だろう。無駄に儚い命を散らす前に、疾く去れ」
試行錯誤しようとした結果、慢心王はどストレートを選択した模様。
「チッ、あの忌々しいバイク女のせいで食料を調達し損ねた上に、まさか食い物に喰われかけるなぞ、洒落にもならん。あいつは次見つけたら必ず殺す……」
ストレートじゃねえ、ただの愚痴になってる……。大丈夫か慢心王。
「……もしかして、お腹すいてるの？」
おっと、ここでなのはちゃんの指摘が炸裂。図星を刺された俺はどうする！

「……我はお腹が空いたぞ」

それはまさか！　正直に答えた!?

「なら、なのはのとこのお店に行くの！」

「……なんだと？」

あれ、これはなのはちゃんから意外な提案。一体どう言う風の吹き回しだろうか。

「……生憎持ち合わせは無い」

「なのはが奢るよ！　お小遣いくらいはちゃんとあるの！　それに、お客さんとして入るのなら、まだ迷惑をかけたうちに入らないもんね！」

にこやかに笑うなのはちゃん。……君は天使か！

「……ほう、貴様のような小生意気な雑種にも王を敬う気持ちがあったとは驚きだ。その敬意を評し、我の嫁にしてやっても良いぞ？」

「いや、いらないの。……それより！　早く『翠屋』に行くの！」

「おいっ！　押すな！」

その後、なのはちゃんに強引に連れられ、俺は喫茶『翠屋』へ向かうことになった。

「翠屋はね、なのはのお母さんと、お姉ちゃんと……あと、とっても強いお兄ちゃんがいるの。……ギル君、『紹介』してあげるね？　にゃはは」

「ギル君では……まあ、食事の招待に免じて今回だけは許してやろう。フハハハハハ!!」

この世界に転生してから初めて、まともな料理を食べられると知って、これまで以上にご機嫌だった俺は……。

後ろから押してくるなのはちゃんが、今まで見たこともないほどに満面の笑顔を浮かべていたことに、一切気が付かなかった。

7ギル目　満足させてくれよぉ!!

『翠屋』。最近雑誌で取り柄げられている有名な喫茶店だ。
その店が注目を浴びているのは、なんといっても、美味しいケーキの存在が大きい。
翠屋のマスターの妻、高町桃子には、東京の有名ホテルで働いていた実績があり、超一流のパティシエールであることはまず間違いない。
店一番の人気はシュークリーム。その味を知ってしまうと、他のシュークリームでは満足できなくなると噂される程であると言われているが……。

「この店じゃなきゃ……満足できねぇ……ぜ……」
「だったらここで満足するしかねぇ!!」
「俺達の満足は、この味だ!」
「イッツ・シュークリームタイム!」
「どうだ!　極上の味だろ!?　翠屋ぁ!」
「ほどよく!　まろやか!　優しい口当たりに支配され、完美なる甘味に舌太鼓を打ち鳴らす地上の楽園!　今この俺が味わっている生クリームを貴様も味わうがいい!」
「ウメェェェ!　裏切ったのかぁ!　俺を……売ったのか!　今まで食ってきたシュークリームどもぉぉぉ!!」
「値段９００……あと少し、あと少しで俺はお土産用中箱を買える。その中身がシュークリームなら、俺は満足だ……」
「相変わらずだな……お前はただ甘くあろうとしてる訳じゃない……そのクリームで俺の心を引き出そうとしてるんだろ……わかるよ」
「翠屋は死なねぇ」

まあ、噂に違わず今日の翠屋も大繁盛である。

「……なんだ、国民の反逆か？」
「いや、デモ活動じゃないと思うの……」
こりゃ、娘を放置するわけである。
店内は一心不乱にシュークリームを頬張る客で埋め尽くされていた。
俺となのはちゃんは店の入口に立ち尽くし、その混沌とした光景をボーゼンと眺めていた。
「いらっしゃいませ……あら、なのは？」
そんな俺達に声をかけたのは、２０代も前半くらいの若々しい女性だ。
大学生くらいのバイトかと思ったのだが……。
「あ、お母さん……」
なのはちゃんの一言に、俺は目を疑った。
お母さん？　こんなに若い人が、なのはのお母さんだと？　……いや、ちょっと待て、確かなのはちゃんには兄や姉がいると言っていたな……。
……俺は、世界というものを信じられなくなった。

「どうしたの？　なのはが店に来るなんて珍しい」
「あ、ええとね……。ここでご飯を食べようと思ったんだけど……忙しそうだから別のところにしようと……」
「そんな、いいのよ。うちで食べていきなさい。それに、そっちはお友達でしょう？」
なのはの母が俺の方を向く。
「友だと？　笑わせてくれる。こんな小娘が我の友を名乗るなど、身の程を弁えよ、雑種」
実の母親の前で娘を貶す俺、いつもの調子である。
「え？　あの……ええと？」
「ごめんなさい、お母さん。ギル君はいつもこんななの」
「ギル君ではないわ！　いいか？　我は最古にして唯一の英雄王、ギルガ「満足させてくれよぉ!!」「轉るな雑種どもぉ!!」

店の客は増えるばかりで、どうやら俺達はかなり邪魔になっているようだ。
「あ、ごめんなさいね、ギル君？　またあとでお話しましょう。私は高町桃子。なのはの母です」
「う、うむ。……疾く往くがいい」

……あの慢心王が引くレベルの忙しさらしい。半端ねえな。
パタパタと駆けていく桃子さんの姿を労わるような目で見送り、俺は「フン」と鼻を鳴らした。

「小娘。この店でゆっくり食事を摂れる気が全く以てしないのだが」
「うん、なのはも薄々そう思ってるの」
食事どころじゃない混沌の中、俺達は未だに立ち尽くす……。

「……ギル君、向こうの席が空いたから座ろう」
「ギル君ではない。あと、この我に指図するな！　……行くぞ」
「どっちみち座るんだね……」
なのはちゃんが指したのは一番奥のテーブル席。俺となのはちゃんはそこに向き合って座った。
「取り敢えず、この日替わりランチでいいよね？」
「構わん。雑種の食べ物なぞ、どれも対して変わらんだろうしな。我の思う至高には到底届くまい」
「もー、またそうやって意地悪言う。お母さんの料理を食べてビックリしても知らないんだから」
「ハッ！　この我を唸らせるようなものがあるとも思えんがな」
そう言いつつ、腕を組みソファの背もたれにふんぞり返る俺。
なのはちゃんはどこか困ったような笑みを浮かべたあと、カウン

ター席の向こう側、厨房に向かって手を振る。
　すぐに店員らしき女性が出てきた。
「はい、ご注文お決まりでしょうか？」
「日替わりランチを２つ」
「かしこまりました」
　……この混みようじゃ、すぐには来ないだろうな。
「……退屈だ。小娘、何か余興をせよ」
「いきなり!?　なのは、持ちネタなんて無いの！」
「なんだ、退屈している我を笑わせずして道化を名乗るとは、思い違いも甚だしいな」
「甚だしいのはギル君の方なの！　なのはは道化師さんを名乗った覚えは全くないの！」
「ギル君ではない。……はぁ、自覚もないとは、救いようもない嫁だな。だが、そういうところも我は受け入れてやろう」
「大きなお世話なの！　それに、ギル君だって持ちネタなんてないでしょ？」
「ギル君ではない。……フン、我にとって人を笑わせることなど造作もないぞ？」
「げ、なんか意外なの」
「失敬な。……我がただ〝笑え〟と一言告げるだけで国民共は爆笑の嵐に包まれた」
「暴君的解決!?」
「まあ、その後煩いから首を撥ねたが」
「悪質な独裁者なの!!」
　俺の自慢の笑い話が、大分物騒な形に変換されてしまったが、それでも大幅に時間を潰せた。
　なのはちゃんはツッコミに疲れたようで、テーブルに突っ伏しながら、コップの水に浮いている氷をストローでツンツンしていた。

　俺も話疲れたので、ゆっくりソファで寛いでいたんだが、１０秒もしないうちに店員の一人が来た。

「あの、お客様、大変申し訳ないんですが……」
　どうやら、料理が運ばれてきたわけではないらしい。
「なんだ、申してみよ。低俗な雑種共のやること、多少は目を瞑ろうではないか」
「こらー！　あ、ごめんなさい店員さん！　この子調子に乗ってるだけなの！　許して欲しいの」
「は、はぁ……。え、えっと……申し訳ないのですが、こちらの席……相席させて頂いてもよろしいでしょうか」
「相席……だと？」
　言われて店内を見回してみる……うん、空いている席がないな。
　もっと言うなら、３人以下で座っているテーブル席が一つもない。多分、全部相席している結果だろう。……どんだけ人気だったらこんなに混むんだよ。雑誌に載っただけだろ？　え、違うの？
　だが、これじゃ断る理由もないよな……。
「ふん、よかろう。我の邪魔さえしなければ良い」
「あ、なのはも大丈夫なの」
「ありがとうございます」
　そそくさと離れていく店員。きっと相席する客を呼びに行ったのだろう。
　またしばらく待つと、一人、こちらの席に向かって来る人影を発見した。
　興味がないかの様に横目で見ていたため、その顔をよく確認できなかったが、体格的には子供のようだ。
　その人影はなのはの隣に立つと、こちらに視線を向けた。
「ここ、相席失礼するわ……って、なんで貴方がここに？」
「ん？」
　どっかで聞いた声だな……そう思い顔を上げると、そこにいたのは……。
「なんだ、道化か」
「……その反応、傷つくわね。私も一応レディなんだけど……ギルガメッシュ様」

ジト目を向けるアリサの姿だった。

「へぇ、街でたまたま会って翠屋に？　……貴方達、随分仲が良かったのね」
「よくない（の）」
「……仲がいいのね」
　アリサが加わり、より賑やかになったテーブルで俺達は会話を弾ませていた。
「そうか、小娘と道化は前に会った事があったな」
「ええ、あの時はバタバタしてて、ちゃんとした自己紹介をしてなかったわね。私は、アリサ・ローウェル。聖祥大学附属小学校に通う４年生よ」
「あ、はい！　高町なのはです。私も、来年聖祥に通うことになります！　よろしくお願いします！」
「そう……貴女も聖祥に。てことは、私の後輩ね」
　女同士の極めて日常的な会話に和まされつつ、俺は水を一口煽る。
「そう言えば、道化は何故ここに？」
「何故って……休日のティータイムを有名な喫茶店で過ごしたいと思うのは普通のことでしょ？　……まあ、ここまで人がいるとは思わなかったけど」
「ふん、違いない」
「お待たせいたしました。日替わりランチです」
「おお、待ったぞ」
　さて、ようやくありつけた食事である。
　俺は目の前の料理を見る。
　日替わりランチということは、毎日内容が変わるのだろう、さて、記

念すべき一回目のメニューは……。

「なんだこれは？　……ハンバーグ？」
「煮込みハンバーグね。日替わりにしては手が込んでるじゃない」
「ふん、挽肉を固めて焼いた安物か。王の口に入れるに相応しいものではないな」
「ギル君、今全世界のハンバーグ愛好家を敵に回したの」
「ギル君ではない。そして、そのような有象無象、いくら敵に回そうが我の不利益など一切ないわ」
「貴方は本気でハンバーグ好きの人達に謝りなさいよ」
　外側の俺ほどではないが、ハンバーグよりはステーキの方が好きなんだよね。いや、ハンバーグも好きだけどさ。
「それに、見たところ合い挽きか」
「いや、貴方は日替わりランチにどこまで求めてるのよ」
「……それもそうか」
　おお、俺が妥協するとは珍しい。それじゃ、頂くとするか。
「噂に聞く翠屋の力量……見せてもらう！」
　そして、俺はひと切れのハンバーグを口に入れ……。

　何かが……弾けた。

「ぐふっ!?」
「ギル君（王）!?」
「な……なんだこれは……。合い挽き……安物の肉を……ただソースで煮込んだだけの、上品さの欠片もない、至高には到底叶わぬはずの……このハンバーグが……」
　今まで食った、あらゆる料理を……超越している！
「この我が……相手の力量を読み違えていた？　し、信じられん……我の感覚が……これを至高の一品だと告げている……」
「ふふん、ザマァなの」
「王が狼狽える姿なんて、滅多に見られないわね。いい場面に遭遇し

たわ」
「小娘、覚えていろ」
「なんでなのはだけ!?」
感想を言いつつ、ハンバーグを次々と胃に収める俺。
美味い。これは美味いぞ。
「……まあまあだな」
「ばかな……早すぎるの！」
「1分もせずに食べ終わったわね。どんだけお腹空いてたのよ」
「喧しい！　おい店員！　食後のコーヒーと甘味を出せ！」
「かしこまりましたー」
慌ただしく食器を運ぶ店員に注文を出し、俺はソファに背を預ける。
……にしても、美味かった。
「……そのコーヒーとデザートもなのはの奢りだって分かってるの？」
「何か問題か？」
「……ヒモ」
「……ヒモ」
「ヒモではない！　王の暮らしは民からの搾取によって成り立つ。民あっての国とは、こういうことなのだな！」
「なんか違うと思うの！」
このヒモめ！　……いや、俺か。
我ながら情けないことである。
「さあ、あとはこの店自慢という、シュークリームとやらを試させてもらうとしよう」

そして……。

「……我は……このシュークリームでしか満足できない」

「ギル君待つの！　このままじゃギル君まであの変なお客さん達の仲間入りなの！」
「ええい！　我を止めるな！　我はもっとこのシュークリームを求めるのだ！」
「嫌なの！　ギル君が行ったら、なんか変なことになる予感しかないの！」
「逝くぞ！　これからここは戦場と変わるだろう！　有象無象の雑種共！　残ったシュークリームは全て我のものだァ!!」
「わぁあああああ！　ギル君が乱心したの！」
「ギル君ではなぁあああああああい!!!」
「……愉悦ね」
「アリサちゃんも黙って見てないで止めて欲しいの！」

これだ、この味こそ俺の求めた至高……。行くぞギルガメッシュ。満足の……その先へ！

「……落ち着いた？」
「……落ち着いた」
数分後、先程までと打って変わって、どことなくシュンとした俺がいた。
「まさか……たかがシュークリームごときに我が王道を乱すとは……」

「ふっ、他愛ないの」
「小娘貴様ァ……！」
勝ち誇った笑みを浮かべるなのはちゃんと、それを睨みつける俺。
いつもと立場が逆転しているのだが、それだけ翠屋の魔力は凄まじかったと言っておこう。

「はいはい、いい加減にしなさい。折角のコーヒーが不味くなるじゃない」
「……貴様は我の臣下であろう？」
「週休８日ですから」
「小娘……我を裏切るのか！」
「週休８日ですから」
「ぐぬぬ……」
はぁ、随分と慌ただしいランチタイムであった。
だが、久しぶりのまともな食事というだけでも儲けものだ。
「ふん、王たる我には不備そのものであったが、貴様なりの敬意と思って我慢してやろう。忠道大儀である」
そう言い残し、俺は店を出る。
いやぁ、満足満足。

「あ！　ちょっと待つの！　まだお兄ちゃんに……って、もしかして今日は修練場なの⁉　お兄ちゃん……今日は手伝いをするとか言ってたのに……騙されたの」
「なのはちゃんが何を企んでいたのかは知らないけど、失敗したようね」
「うぅ……奢り損なの……」
「まあまあ、私とお話しましょう？」
「あうぅ……」
「元気出しなさいな」

よくわからない理由で少女達の友情が芽生えていたのは、俺の素知らぬ所である。

～とある部屋～

パソコンのデスクトップから漏れる光のみが辺りを照らす、薄暗い密室。怪しげな機械や器具の並ぶ不気味な部屋で、一つの影がユラユラと揺れ動いていた。

「フフフ……フフフフフ……」

影は、不気味な声を漏らしながら、徐々に震えを激しくする。

「フフ……フフフ……フゥーーーーハッハッハッハッハッハッハッハ!!!!」

そして、上体を反らしながら雄叫びを上げる。

「フゥーーーハッハッハッハッハッハッ……ゴホッ……コホッ……フゥーーーーーーーーーーハハハハハハハハ!!!!」

途中でむせながらも、更にその笑い声は拡大していく。

「フハハハハハ!!　フゥーーーハハハハハハ!!!　フゥウウウウウウウ!!!　ッハハハハハハ!!!　フゥウハハ「うるせえ！」あ、すいません」

「ドン！」と叩かれた壁に向かって頭を下げ、それでも影は「クフフ……」と不気味な笑みを零す。

「……この結果が本当だとしたら……明日は、研究所に向かわなくてはな……」

髪を掻き上げる仕草をしつつ、その影が顔を向けた先には……。

「ＡＬＬ　ＣＬＥＡＲ」と表示されたパソコンがあった。

「失敗は許されない……『機関』に立ち向かうために……この実験は、なんとしても……」

人影は、尚も、笑い続けていた。

８ギル目　フゥーハハハハハ!!

「……今朝もまた清々しい。この我のスポットライトたる太陽もよく輝いておる！　……我を見下しているように見えるのは些か許しがたい事態だが、貴様も我の所有物の一つに過ぎん。寛容な我が貴様を許してやろうではないか（おはよう、今日も太陽が眩しいＺＥ☆）」

たまにはと思って朝の挨拶した結果がこれだぜ。この体は碌におはようも言えんのか。

ボロボロの神社の中で俺は目を覚ます。

またどこからか拾ってきたのか、赤いソファをベッド代わりに使っている。

それでまあ、朝起きてすることと言えば、洗顔と髪の手入れだ。

洗顔は外に出て行うため、まずは髪の手入れ。

それにはまず、鏡が必要である。

そのために俺は、この部屋の奥の方にあった御神体らしき鏡を使用するなどという、とんでもなくバチ当りなことを平然とやってのける訳なのだが……。

この日も例に違わず、真っ直ぐその鏡に向かって歩く俺。

だが、今日はいつもとは少し違う朝だった。

「……ん？　これは……見事に割れているな」

そう言う俺の視線の先。そこには、円形の小さな鏡が、綺麗に真っ二つに割れてしまった無残な姿があった。

昨日まではヒビすら入ってなかったというのに、不思議な話である。

「……このオンボロ神社の神が死んだか。ふん、人に忘れられながら死にゆくとは、なんと無様なことか。生きる意味を、生きる術を他人

に委ねるなど……なんと脆弱。こんなモノが世界を創造し、管理しているなど、到底信じられぬことだな。……だが安心せよ。この世界、全ては我の庭だ。貴様はもう必要ない。何故なら全ては我が物だからだ」

御神体が割れた……ってことは、この神社が祀っていた神が……って事か。

一応、この神社に世話になっていた身として、少しばかり思うところがあるな。

「……ちっ、これでは鏡が使えんではないか。死んでなおこの我に面倒をかけるとは……やはり神は目障りでしかないな」

あ、はい。思うところはないと……。

「……また新たな鏡が必要か」

……そう言えば。前にいたあの廃ビル、鏡が置いてあったよな。

あれ？　あそこ取り壊されたんだっけ？　持ってくりゃ良かったなぁ……。

あ、そう言えば、2番目に住んだビルの方、あそこにも幾つか鏡が置いてあったような……。

「退屈凌ぎには丁度いいな。……では、行くとしよう」

今日の目的が決まったところで、俺は神社を後にした。

「来たぞ雑種。さあ、我のリンゴを献上せよ」

「また性懲りもなく……てめえに食わせるリンゴはねえ！」

「なんだ、仕入れておらんのか。まったく、商人の風上にも置けん」

「あんだとぉ!?　ほら見ろ！　ここにうち自慢のリンゴがあるだろうがァ！」

「なんだ、あるではないか」

「しまったぁあああ!!!」

ま、どっちにせよ最初に来るのはここ(商店街)なんだけどな。

ところ変わって廃ビルの近所。

「ふん、流石にこの辺りは活気もないか」

海鳴市の中でも端の方に位置するこの場所では、人通りはかなり少ない。

だからこそ、俺はここを根城にしてたんだけどな。

「確か……あそこか」

辺りを見渡し、見覚えのあるビルを見つける。

……確か、アリサに勧められて一泊だけしたんだったな。……暑さに負けて出て行ったけどな。

早めに用事を済ませてしまおう。そう思い俺は、ビルに向かうのだった。

……その用事が、鏡をくすねるだけだという事がなんか遣る瀬無いが。

「……ほう、思った通り、丁度良い大きさの鏡もあるな。これなら我の部屋に置くにも邪魔にならんで良い」

俺の判断基準がだんだん庶民寄りになっている件。

「こんな所で至高の品を見つけるという方が無理のある話。我は聞き

分けの良い王だからな。ならば次いで優先すべきは利便性であろう」
満面のドヤ顔で言い放つ俺に、心底呆れる。
お前の求める至高ってどんなだよ……。

自分の発言に自分でツッコミを入れるという、もう既に慣れた事をしながら歩き続ける。

落書きだらけの壁や、割られた窓ガラスを見ていると、いつか見た心霊番組の廃ビル探索を思い出す。
3分毎に怪奇現象が起こって、最近のバラエティはヤラセを隠すのを諦めたな……と呆れたのはいい思い出だ。

まあ、折角来たんだ、ちょっと肝試し気分で歩き回っても面白そうだ。

……そう思ったその時だった。

「……ウァァ」

どこかから、得体の知れぬ呻き声が響いた。

「……なんだ？　この不愉快な雑音は」
よく耳を澄ましてみる。……こんな廃ビルに人がいるとは思えないんだが、また前みたいにどっかの誰かが誘拐されてるんじゃなかろうな。
「……コ……ス……」
声が近い。ここは一階だから、いるとしたらこの階か、二階だな。
「……タ……ケ……テ……」
この声、小さな子供？　いや……それにしては若干低い……。

一体、どこから聞こえるんだ……。
「……ハハ……ハハハ……」
……なんか笑ってやがる。
マジで不気味だなー、と思いつつ、辺りをブラブラする。……ん？
この辺りで声が大きくなった。
近いのか？
小さな物置部屋に入り、声が一番聞こえる地点を探り当てた。
音の発生源は……なんと意外なところだった。
「下……か？」
このビルに地下があるなんて知らなかった。というか、地下に降りる階段なんてなかったと思うんだが……。
……ん？　これは……。
「なんとも幼稚なものよ。これで隠したつもりとは……」
床の一部、明らかに他のタイルよりも新しいものがある。
……テンプレな地下への入口だな。わざとか？
胡散臭くて、怪しくもある仕掛けだが、ここまで来たんだし、気になったままじゃ余り気持ち良くないしな。取り敢えず地下に潜ってみるか。
声の正体を確認してから帰ってもいいだろう。
「……ふん！」
新品のタイルを（わざわざ）踏み抜き、奥に進む。
不気味な笑い声は……まるで侵入者を歓迎するかのように、俺の頬を撫で付けた。

……。

「フゥウーーーハハハハハ!!」

……俺は、地下に?がる長い階段を降り、最下部までやってきた。

「これは……なんと素晴らしい！　ついに完成したぞ！」

すると、そこはテレビでしか見たこともないような、研究所というかなんというか……そんな場所だった。

「ただ一つ欠点があるとすれば、使用する度に摂氏２００。の蒸気が操作モニター……つまり使用者を全力で焼き尽くそうと吹き付けることだが……うーむ、これは改善する必要があるか」

……そして、いくつも並んでいる巨大な機械のうちの一つを眺めながら、意味深に両腕を掲げている、白衣を着た一人の子供がいた。

「だが！　これで一歩前進したことに変わりはない！　フゥーハハハハハハハ!!!」

……その子供は、聞いているだけで不愉快になる高笑いを上げ

……。

「……フゥーハハハハハ！　フゥーーハハハハハハハハハ!!
フゥーーーハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

……ブチッ。

「ええい！　喧しいわ！　雑種ゥ!!」

「ヌッ!?　何奴！　……まさか機関のエェエィジェンツッ!!　くっ、もう嗅ぎつけられたか！　……俺だ。機関の人間と接触した。これより施設の……なんだと？　これも計画のうち？　シュタインズ・ゲートの選択だと言うのか？」

……俺の存在に気付き、焦りだしたと思ったら、悠長に電話を手に取り通話をはじめる始末。……コイツ、何がしたいんだ？

「貴様ぁ……この我を前に随分と無礼な態度ではないか？　どうやらこの科学者は頭と胴を別れさせたいらしいな」

「ちょ、ちょっと待つのだ！　貴様、それ以上近づくとこの俺の発明品が火を噴くことになるぞ！」

俺が一歩近づくと、途端に慌てて後退りする白衣。

発明品？　この子供、発明家か何かの真似事をしているようだ。

室内を見ても、確かに奇っ怪なものばかりが並べられている。これら全てがこいつの作ったものなのか？

……だが、結局は子供の悪ふざけだろう。

「ふん、その様な戯言でこの王が臆すると思ったか？　愚か者め」

「ち、違うぞ！　ほんとにそれ以上進んだら……アアッ!!」

「……なんだ？」

ツカツカと進んでいくと、細い緑色の光線が俺の胸に当たり、その瞬間……「ピーピー」と、ブザーの様な音が聞こえた。

音の発生源を見ると、そこにはガスボンベと、ライターがくっつい

たような機械が、監視カメラのようにぶら下がっていた。……いや、実際にカメラもついていた。

「なんだと!?　何だあれは!」

「フゥーハハハ!　あれは俺が開発した侵入者迎撃装置!　『【未来ガジェット０６３】ヒィ!　っと驚け!　余所者はかえんな!　カメラ』だ!」

ネーミングセンスよ。

「そのカメラには顔認証装置がついていて、この俺以外の顔を認識すると、付属しているガスボンベとライターが起動し、簡易火炎放射器として侵入者を焼き尽くす仕組みとなっているのだ」

思ったよりハイテクだな。確かにそれなら侵入者の撃退に有効な……って、それって!

「こいつ、我を……」

「フゥーハハハハハハ!　機関の企みもこれでオシマイだ!」

「貴様ぁあああ!」

「フゥーハハハハハハハハ!!」

くっ!　俺の人生はここで終わってしまうのか……!

悔やんでいる間にもブザーは無慈悲に鳴り続ける。

いつ来るともしれぬ火炎から身を守るため、腕を頭の前で交差する。

……こんなことが意味をなすとも思えんが、多少は生き残る可能性も……。

「あ、顔を隠すと『顔認証システム』が動かなくなってしまうのだ」

「……貴様、舐めているのか?」

普通侵入者は覆面か何かで顔を隠しているものだろう……。

「あー、その……な。顔を認証してから、俺かそうでない人かを見極めるのにも、2分程の時間を有するし、たまに俺に対して火を噴くこともあるんだが……」

「欠陥品ではないか!」

「欠陥品ではない！　未来ガジェットは世界の支配構造を変革させるのに必要なのだ！」
あぁ、今更気付いたが……こいつ、あれだ。頭が残念なタイプだ。
誰しもが患った事のある不治の病的なアレだ。
「世界の支配構造？　ハッ！　安心せよ。この世界は全てこの我の物！　世界を支配しているのは我だ！　こんな完璧な王が統辞しているのだ。変革など必要あるまい？」
「なんだと!?　やはり貴様が機関の……まさか黒幕自らお出ましとは、この俺も有名になったものだ。……俺だ、ついに機関のボスと対面した。ああ、大丈夫だ、問題ない。ここは俺の研究所だ。奴に勝つ手段など、３４５８通りは考えつくさ。生き残って、また酒を飲みかわそうじゃないか。エル・プサイ・コングルゥ……」
またどこかとの通信をしだした。
……マジで、何なんだよこいつ。
「……どうやら死にたいらしいな、雑種」
「ふふん、そう偉そうな口を叩いていられるのも今のうちだぁ……。未来ガジェットの恐ろしさをその身で味うがいい！」
そう言って、科学者もどきが白衣の裏から取り出したのは……拳銃!?
「これは『【未来ガジェット０３７】下手な鉄砲数打ちゃ当たる』だ！
これは銃弾をコンパクトに収縮させ、銃の内部をくり抜くことにより、装弾数を元の１００倍にまで増やしたものだ！　まあ、火薬を抜いてしまったため力が弱く、飛距離を出すために弾はプラスチック製にして軽量化することにより……」
「ただのモデルガンではないか！」
取り出した弾丸は、オレンジ色のＢＢ弾だった。
「ぬぅ……ならこれだ！　『【未来ガジェット０２３】超光学迷彩装置』！」
科学者が指し示すのは、とても巨大な機械。
「これに触れるだけで、俺の体はどんなレーダーでも発見できなくなるステルス迷彩を纏う！」

「なんだ、いきなりスケールが変わったな」
「ただし、効力は俺がこの装置に触れている間のみ。さらに一回きりの使い捨てで、電気代も洒落にならんくらい掛かる」
「なんだ、ただの粗大ゴミではないか」
「ぐぬぬ……」
……こいつ、怪しいが、悪い奴でもないんじゃないか？
「……貴様如きを処刑するために体力を使うのが面倒になってきたな」
「あまり俺を甘く見るなよ！　俺にはまだ、切り札が残っている！」
「なんだと!?　この期に及んで、一体何を隠しているというのだ!?」
あ、これ完全に遊びだしたわ。
だって俺の口、今にも笑いだしそうなくらい引き吊ってるし。
「『【未来ガジェット２０４】ＦＧ２０４　２ｎｄ　ＥＤＩＴＩＯＮ　Ｖｅｒ２３１』！　ついさっき完成したばかりのタイムマシンだ！」
「タイムマシン……だと？」
なんか、予想外のモノが出た！
「フゥーハハハハハハ！　どうだ、恐れおののけぇ……この狂気のマァッドサイエンティスト！　鳳凰院　凶真の頭脳の前に!!!」
両手を広げ、胸を張ってそう名乗る科学者……ほうおういん　きょうま（なんて書くん？）
タイムマシンか……それが本当なら確かにすごいな。

「……で？」
「……へ？」
「……で、そのたいむましんとやらで、この我をどうやって倒すつもりだ？」
「……投げる？」
「そのデカブツを投げてみろ！　できれば我が褒めてやるぞ!?」
なんとも馬鹿らしい……。こいつ、本当にタイムマシンなんて作ったのか？
……いや、無いな。

「ふん、少し遊んでやれば、もっと愉快なモノが見れると思ったのだが……期待外れか。まさかありもしないたいむましんなどを自称するなど……ネタ切れがあまりに早すぎやしないか？」
「に、偽物ではない！　これは本物のタイムマシンだ！　……っ!?
……そうか、そこまで疑うのなら、今から証拠を見せてやる」
「……なんだと？」
　ん？　いきなり雰囲気が変わった……？　なんか、達観しているというか……「計画通り」みたいな表情になりやがった。
「……ギルガメッシュ」
「っ!?　……ほう、我を知っているか」
　あいつ、俺の名前を？　……まだ名乗ってないはずだよな？　一体何故……。
「最古にして唯一の英雄王……か。随分と大きく出たものだ。過去から未来までの尽くを支配？　この世全ては貴様の庭？　なんとも面白いやつだな」
「……貴様、雑種の分際で我を語るか。……面白い。その今更ながらの褒め言葉はどこで学んだ？」
　それら、鳳凰院（この漢字だよな？）の口から出てきた言葉は、如何にも俺が言いそうな……というか、言った事ばかりだ。
　……どこで知ったんだ？　俺のことを……。
「ふん、貴様自身に教えてもらった事だぞ？　ウルクの王……まあ、貴様は覚えていまい。……何せ、〝未来〟での出来事だからな!!」
「未来……？」
　未来……確かにそう言った。
　まさか、な。
「未来を支配しているのは貴様だけではないという事だ。ン残念だったなぁ、キンンングよ！」
　「ビシィ！」と指を突きつけ、カッコいいポーズをキメた鳳凰院が叫ぶ。
　……なんだ、キングって。

「……ほう？　未来の我を見てきた、ということか。面白い」
「ふん、それはこっちのセリフだ。　貴様とは気が合いそうだ。……よし、今からキングを、ラボメンナンバー００２に任命する！」
「ラボメン？　なんだそれは」
「この、『未来ガジェット研究所』で俺の相棒を務める者の称号だ。ありがたく受け取れ！　キングよ！」
「……その無礼な態度は、愉快なものを見せてもらった褒美として大目に見てやろう。まあ、我は王だからな。貴様が献上するというのであれば、貰ってやろう。ありがたく思えよ？　……狂人」
……あれ？　いつの間にか、仲良くなってるんだが。
「狂人……そう！　俺こそ、狂気のマァアアッドサイエンティスト！　鳳　凰　院　!!　キョォオオオオオ……マだ!!」
「キング……。この我が！　最古にして唯一絶対の英雄王！　この世全てを己の財とし、現在過去未来、あらゆる時空の頂点に君臨する、ギルガメッシュだ!!」
「「フゥーーーーハハハハハハハハハハハハ!!!!!!!!」」
……お前らが喋ると、どっちがどっちだか分かんねえよ！
そんな俺のツッコミは、膨張し続ける高笑いにかき消されたのだった……。
……鳳凰院凶真が仲間になった！

「……なんだと？　身分がないから家に住めない？」
「ふん、馬鹿なことを言うな。この世の全ては我の庭だ。我はもう世界に住んでいる。身分など、我が〝王〟であるということ以外に必要ない」
「……ふむ、少し待て（カタカタ……タタンッ）」
「……何をしている？」
「今、日本政府のサーバーにハッキングを仕掛け、キングの経歴を偽造した。これで銀行口座も住民票も好きなだけ発行できるぞ」
「マジか。やるではないか」
「この俺に……不可能はない（ドヤァ」

あれ、ホームレス終了のお知らせ？